東洋文化研究所紀要 第167冊
平 成 27 年 3 月 抜 刷

アーザル・カイヴァーン学派研究
――*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht* の写本蒐集と翻訳校訂――

青木　健

アーザル・カイヴァーン学派研究
――*Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht* の写本蒐集と翻訳校訂――

青木　健

目次

1. アーザル・カイヴァーン学派概論
1-1. アーザル・カイヴァーン学派とは何か
1-2. アーザル・カイヴァーン学派のペルシア語文献
1-3. アーザル・カイヴァーン学派文献の虚構性
1-4. アーザル・カイヴァーン学派に関する先行研究
①ゾロアスター教文献としての理解
②スフラワルディーの照明学派文献としての理解
③同時代のホルーフィー教・ヌクタヴィー教との関係で理解
1-5. アーザル・カイヴァーン学派に関する現在の研究状況
①アーザル・カイヴァーン学派に関する新出資料
② *Dasātīr-e Āsmānī* の新理解
③スフラワルディーの惑星崇拝に関する指摘
④ヌクタヴィー教との比較に対する批判

2. 『ダースターネ・モーベダーン・モーベド・ダーダール・ダードドフト』研究
2-1. 未発見のアーザル・カイヴァーン学派文献 36 点

2-2. アーザル・カイヴァーン学派文献としての指標

① イラン民族主義

② 惑星崇拝と周期的時間観念

③ スフラワルディーの惑星崇拝と照明学派的述語

2-3. *Dāstān-e Mōbedān Mōbed va Keyfiyat-e ān* の写本・刊本情報とその評価

2-4. Majles 13522/4（Tehran）写本の書写生

2-5. Majles 13522/4（Tehran）写本における『ウラマー・イェ・イスラーム』（UI-2）の引用

3. Majles 13522/4（Tehran）写本研究

3-1. 正統的ゾロアスター教神官＝ズルヴァーン主義＝アーザル・カイヴァーン学派

3-2. 今後の課題と展望

① ゾロアスター教ズルヴァーン主義研究上の課題・その 1

② ゾロアスター教ズルヴァーン主義研究上の課題・その 2

③ アーザル・カイヴァーン学派研究上の課題・その 1

④ アーザル・カイヴァーン学派研究上の課題・その 2

参考文献表

写本

石版刷り

刊本

翻訳

研究

謝辞

図表

図 1：アーザル・カイヴァーン学派の近世ペルシア語著作の出版状況
図 2：アーザル・カイヴァーン学派の近世ペルシア語著作の翻訳状況
図 3：アーザル・カイヴァーン学派文献の虚構①
図 4：アーザル・カイヴァーン学派文献の虚構②
図 5：虚構を用いないアーザル・カイヴァーン学派文献
図 6：アーザル・カイヴァーン学派文献における伝統的ゾロアスター教文献の引用
図 7：*Shārestān-e Chahār Chaman* で言及されるアーザル・カイヴァーン学派文献 24 点
図 8：*Dabestān-e Mazāheb* で言及されるアーザル・カイヴァーン学派文献 20 点
図 9：*Dāstān-e Mōbedān Mōbed va Keyfiyat-e ān* 写本情報の整理
図 10：1478 年から 1773 年にかけて作成された往復書簡 19 ～ 22 点のリスト
図 11：1600-68 年の往復書簡のコロフォンに見られるゾロアスター教神官名
図 12：Majles 13522/4（Tehran）写本と刊本のコンコーダンス

1. アーザル・カイヴァーン学派概論

1-1. アーザル・カイヴァーン学派とは何か

「アーザル・カイヴァーン学派（Āzar Kayvān School, Āzar Kayvāniyān）」とは，16 世紀後半のイランで，ファールス州イスタフル出身と自称し，「アーザル・ゴシャスプ（Āzar Goshasp）」の息子「アーザル・カイヴァーン（Āzar Kayvān, ca. 1533-1618/19）」[(1)]と名乗った指導者[(2)]を中心として成立した思想学派であ

る。彼らは，当初はイラン南西部のシーラーズで活動しており，ゾロアスター教神官 Mōbed の称号を自称する弟子たちを中心に，名前が判明しているだけで 20 人前後の集団を形成していた。

「アーザル・カイヴァーン」とは「炎の土星」を意味するが，ゾロアスター教徒名としてもイスラーム教徒名としても，他に例を見ない名称である。本名とは別に名乗った尊称（laqab）と思われる。また，学派内の同時代ドキュメント（1-3 の図 5 参照）によれば，彼は 28 年間樽（khor）の中で生活するなど極端な禁欲修行に励む神秘主義者で，通常のゾロアスター教神官とは全く異なる日常を送っていたと伝えられる。

アーザル・カイヴァーンの思想形成には，同時代のイランの知的動向が関与していたと考えられる。内部資料から判明しているところによると，アーザル・カイヴァーンは当時のイランで成立したイスラーム哲学学派「イスファハーン学派」の中の Shaykh Bahā' al-Dīn al- 'Āmilī（1547-1621），Mīr Muḥammad Bāqir Dāmād（d. 1631），Mīr Abū al-Qāsim al-Findiriskī（1562-1640）の 3 名と，特に錬金術に関して知的交流を持っていた。また，Abū al-Ḥasan Āsaf Khān（伝不詳）という学者とも面識があったとされる。これに加えて，アーザル・カイヴァーンの高弟 Farzāne Bahrām ibn Farhād Pārsī（d. 1624）は，Shaykh Bahā' al-Dīn al- 'Āmilī のイスラーム法学講義に出席し，'Abd al-Ṣamad や Mīr Niẓām al-Dīn al-Dashtakī と同窓だったと伝わる。更に，彼は Jalāl al-Dīn al-Dawwānī（d. 1503）の弟子 Khwāje Jamāl al-Dīn Maḥmūd とも交流したとされる。

しかし，1580 年代から 1600 年代の何れかの時期に[(3)]，彼らはイラン南部からインド西部のパンジャーブ州ラーホールに拠点を移し，その後，インド東部のビハール州パトナーに再移転した。この間，アーザル・カイヴァーンはアクバル皇帝（在位 1556-1605 年）のイデオローグである Abū al-Faẓl ibn Mubārak（1551-1602）及び Abū al-Fayz ibn Mubārak（1547-95）兄弟と書簡を通じて交流したとされる。更に，インドでは積極的に宣教したらしく，ヒンドゥー教徒，

ユダヤ教徒，インド西海岸に来航していたヨーロッパ人宣教師なども，陸続とアーザル・カイヴァーンの弟子になったと伝えられている。

アーザル・カイヴァーン終焉の地はパトナーとされる。その後，有力な弟子が相次いで死没するに従って，アーザル・カイヴァーン学派は徐々に解体に向かう。最後に記録が確認されるのは，孫弟子とされる Mōbed Shāh / Dhū al-Fiqār al-Ḥusaynī al-Ardistānī（d. ca 1670）が，1652 年にデカン高原のハイデラバードで活躍していたとの記録である。要約すれば，アーザル・カイヴァーン学派とは，16 世紀にイラン西南部出身の学祖が始め，1590 年前後にインド北部へ活動の場を移した後，17 世紀半ばにインド南部で滅びた思想集団である。

1-2. アーザル・カイヴァーン学派のペルシア語文献

アーザル・カイヴァーン学派の文献は，現在判明している限りでは，近世ペルシア語で 8 タイトルが存在している。以下がそれらのタイトルと出版状況のリストである。

図 1：アーザル・カイヴァーン学派の近世ペルシア語著作の出版状況

Date	Title	Author	Editor	Publishing Information
1818	*Dasātīr-e Āsmānī*	Āzar Kayvān（d. 1618/9）	Mollā Fīrūz	Mollā Fīrūz 1818, Bombay
1846	*Khwīsh Tāb*	Mōbed Hūsh（d. ？）	Mānekjī Limjī Hātariyā	Hātariyā 1846, Bombay,（Lithography）
ditto	*Zar-e Dastafshār* (4)	Mōbed Sorūsh ibn Kayvān ibn Hūsh（d. after 1627）	ditto	ditto
ditto	*Zāyande Rūd*	Mōbed Khūshī（d. ？）	ditto	ditto
1848	*Jām-e Kay Khosrow*	Poems by Āzar Kayvān and Commentary by Mōbed Khodājūy ibn Nāmdār Heravī（d. 1630） (5)	Mīr Ashraf ʻAlī	Mīr Ashraf ʻAlī 1848, Bombay,（Lithography）
1850 -51	*Dabestān-e Mazāheb*（composed ca 1652-58）	Mōbed Shāh / Dhū al-Fiqār al-Ḥusaynī al-Ardistānī（d. 1670）	Anonymous	*Dabestān-e Mazāheb* 1850-51, Bombay,（Lithography）

1862	*Shārestān-e Chahār Chaman* (composed ca 1610-24)	Farzāne Bahrām ibn Farhād Isfandiyār Pārsī (d. 1624) (6)	Bahrām Bīzhan et al.	Bahrām Bīzhan et al. 1862, Bombay, (Lithography)
1878	*Khwīsh Tāb*	Mōbed Hūsh (d. ？)	Mīrzā Bahrām Rostam Naṣrābādī	Mīrzā Bahrām Rostam Naṣrābādī 1878, (Lithography)
ditto	*Zar-e Dastafshār*	Mōbed Sorūsh ibn Kayvān ibn Hūsh (d. after 1627)	ditto	ditto
ditto	*Zāyande Rūd*	Mōbed Khūshī (d. ？)	ditto	ditto
ditto	*Zūre-ye Bāstānī*	Āzar Pazhūh Isfahānī (d. ？)	ditto	ditto
1909	*Shārestān-e Chahār Chaman*	Farzāne Bahrām ibn Farhād Isfandiyār Pārsī (d. 1624)	Bahrām Bīzhan et al.	Bahrām Bīzhan et al. 1862, Bombay, (Lithography) 2nd edition
1983	*Dabestān-e Mazāheb*	Mōbed Shāh / Dhū al-Fiqār al-Ḥusaynī al-Ardistānī (d. 1670)	Rezā-zāde Malek	Rezā-zāde Malek 1983, Tehran

以上のように，1818 年から 1983 年にかけて，合計 8 タイトルが 8 回に亙って，ボンベイとテヘランで出版されている。だが，刊本の 6/8 を占める石板刷りの全てが写本情報を欠き，懐疑的になるならば，アーザル・カイヴァーン学派文献の実在性や捏造の可能性を問うことも可能であった(7)。

しかし，筆者が 2009 年以降にイランとインドの写本図書館でアーザル・カイヴァーン学派文献の写本蒐集を試みたところ，*Shārestān-e Chahār Chaman* 以外は，刊本の出版年を遡るか，別系統の書写伝統に属する写本を確認できた。しかも，*Dasātīr-e Āsmānī* を除いて，ボンベイと地理的に遠く隔たったイランの写本図書館で発見されている。少なくとも刊本出版時点で，上述のペルシア語文献の 7/8 が実在していたことに疑いの余地はない。

但し，このことは，直ちに上述の刊本の正確さを裏付ける訳ではない。筆者は写本と刊本の照合作業を完全に行った訳ではないが，両者の間にはかなりの乖離があるようである。特に *Dabestān-e Mazāheb* は，インドとイランの両国

で余りにも多数の写本が存在し，且つ写本間の異動が激しいので，底本を確定するだけでも大変な作業になる。

更に，Daniel Sheffield が指摘しているように，*Shārestān-e Chahār Chaman* の 1909 年再版には，初版にはなかった第 4 部（最終部）が付け加えられているが，これは 18 世紀に著された別の占星術書を誤解して（または意図的に）挿入したに過ぎない（Sheffield 2014a, p. 166[(8)]）。本書に限っては，『四庭園の都市』との題名にも関わらず，第 3 部までしか収録していない初版を活用しないと危険である。即ち，今後アーザル・カイヴァーン学派研究を行う場合には，写本の校訂から着手する必要がある。

なお，上記の刊本のうち，以下の 2 点に関しては，英訳が存在する。

図 2：アーザル・カイヴァーン学派の近世ペルシア語著作の翻訳状況

Date	Title	Translater（s）	Publishing Information
1843	*Dabestān-e Mazāheb*	David Shea and Anthony Troyer	Shea et al. 1843, London
1888	*Dasātīr-e Āsmānī*	Mollā Fīrūz	Mollā Fīrūz 1888, Bombay

このうち，*Dabestān-e Mazāheb* の英訳は，1850-51 年に無名氏による刊本が出版される以前に公刊されている為に，幾つか存在する刊本のどれとも一致しない。これに対して，*Dasātīr-e Āsmānī* の英訳は，刊本の編者が生前に準備していた訳稿を死後出版したもので，刊本と英訳は綺麗に対応する。

1-3. アーザル・カイヴァーン学派文献の虚構性

上記の 8 点のうち 5 タイトルには，虚構性が顕著である。その虚構性には 2 種類ある。最も大規模なのが,「古代イランの 15 人の預言者からアースマーニー語（天的言語）で伝えられた預言をサーサーン王朝時代にペルシア語訳した」と主張して一宗の聖典としての体裁をとる *Dasātīr-e Āsmānī* である。その構想の大きさと他の 4 タイトルの虚構に与えた影響から，*Jām-e Kay Khosrow* との類似性とも相俟って（後述），本書の著者はアーザル・カイヴァーン本人と推

定されている。

図 3：アーザル・カイヴァーン学派文献の虚構①

	Prophets	Profile / Prophecy
1	مهاباد	Profile：最初の預言者。聖典『マヒーン・ナーメ』と『カヒーン・ナーメ』＝『ダサーティール』を授かる。 Prophecy：全能の神は最初にバフマン（善思），それから 9 天を創造した。各天は知性，霊魂，体，無数の天使を具えている。9 天の下にある月下界には，地水火風の四元素があり，それらから鉱物・植物・動物が形成される。
2	زي افرام	Profile：最初の預言者の子孫が世界を司っていたが，13 人目が力尽きた時，預言者ザイ・アフラームが出現し，天命を受け継いだ。 Prophecy：第 8 天は黄道 12 宮，第 7 天は土星，第 6 天は木星，第 5 天は火星，第 4 天は太陽，第 3 天は金星，第 2 天は水星，第 1 天は月が支配している。
3	شاي كليو	Profile：第 2 代預言者の子孫が世界を司っていたが，その末裔が力尽きた時，預言者シャーイ・カリーヴが出現して天命を受け継いだ。 Prophecy：神を讃えるアースマーニー語の呪文を伝える。
4	ياسان	Profile：第 3 代預言者の子孫が世界を司っていたが，その末裔が力尽きた時，第 4 代預言者ヤーサーンが出現して，天命を受け継いだ。 Prophecy：天使の数には際限がなく，全てバフマンの統率下にある。人間は，1 日のうち夜明け，正午，日没，深夜の 4 回，星辰，聖火，光に祈禱しなくてはならない。
5	كيومرث	Profile：第 4 代預言者の子孫が世界を司っていたが，その末裔が力尽きた時，人類は相互に争い始めた。そこで第 5 代「土星の預言者」カユーマルスが出現して戦争を鎮めた。 Prophecy：第7天の土星を讃えるアースマーニー語の呪文を伝える。
6	سيامك	Profile：次に，第 6 代「木星の預言者」スィヤーマクが出現した。 Prophecy：第6天の木星を讃えるアースマーニー語の呪文を伝える。
7	هوشنك	Profile：次に，第 7 代「火星の預言者」フーシャングが出現した。 Prophecy：第5天の火星を讃えるアースマーニー語の呪文を伝える。
8	تهمورث	Profile：次に，第 8 代「太陽の預言者」タフムーラスが出現した。 Prophecy：第4天の太陽を讃えるアースマーニー語の呪文を伝える。
9	جمشيد	Profile：次に，第 9 代「金星の預言者」ジャムシードが出現した。 Prophecy：第 3 天の金星を讃えるアースマーニー語の呪文を伝える。神の存在は感覚では理解できず，預言者の言葉を信じ，理性的論証を通すことでしか捉えられない。また，宇宙と人間は照応しており，第 9 天＝肉体，ラヴァーンガルド＝霊魂，ホスティガルド＝知性，最高天＝皮膚，土星＝脾臓，木星＝肝臓，火星＝胆汁，太陽＝心臓，金星＝胃，水星＝脳，月＝肺，黄道 12 宮＝動脈，普遍的火＝熱，大気＝息，河川＝汗，雷＝声，雨＝涙に該当する。
10	فريدون	Profile：次に第 10 代「水星の預言者」フェリードゥーンが出現した。 Prophecy：第2天の水星を讃えるアースマーニー語の呪文を伝える。

11	مینوچهر	Profile：次に第 11 代「月の預言者」ミーヌーチェフルが出現した。 Prophecy：第1天の月を讃えるアースマーニー語の呪文を伝える。
12	کیخسرو	Profile：次に生涯純潔の第 12 代預言者カイホスローが出現した。 Prophecy：ザルトシュトの出現を予言する。
13	زرتشت	Profile：次に第 13 代預言者ザルトシュトが出現した。 Prophecy：全ての存在の本質は，神から光として流出した。最初に知性，次に霊魂，体，天圏，4 元素，鉱物・植物・動物の順で流出した。地上にあるものは天界の似姿であり，光と影の関係にある。
–	سکندر	Profile：アレクサンダー大王。預言者ではないが，独立の章が設けられ，言及されている。
14	ساسان نخست	Profile：次に第 14 代預言者サーサーン 1 世，本名アーザル・サーサーンが出現した。彼はダレイオス 3 世の子で，アルダシール 1 世の親戚である。アレクサンダーのイラン征服の際，ヒンドゥースターンに避難し，洞窟で神を讃えた。彼の為に，神はイラン人の罪を許し，アルダシール 1 世をサーサーン朝初代皇帝とした。彼はヒンドゥースターンで死んだが，息子はイスタフルへ行って，アルダシールの相談役となり，多くの星辰崇拝寺院と拝火神殿を建立した。 Prophecy：モーゼ，イエス，マーニー，マズダク，ムハンマドの徒に追随してはならない。イランはいずれアラブ人，次にトルコ人に征服されるであろう。
15	ساسان پنچم	Profile：最後に第 15 代預言者サーサーン 5 世が出現した。彼はサーサーン 1 世の子孫で，ホスロー 2 世パルヴェーズの時代に出現した。ホラーサーンのメルヴで『ダサーティール』を授かる。 Prophecy：『ダサーティール』のペルシア語翻訳と注釈を執筆。

ここに示された預言者のうち，第 5-13 代の 9 名は，古代ペルシア神話上で既知の存在である。しかし，第 1-4 代と第 14-15 代の 6 名は，他に典拠を見出せず，アーザル・カイヴァーン学派文献にのみ出現する預言者である。また，本書は「アースマーニー語本文＋ペルシア語訳注」という体裁をとるものの，アースマーニー語とは，近世ペルシア語を元に人工的に作成された言語であると判明している。即ち，現代の基準で言えば，本書は偽作文献に分類されざるを得ない。

次に，*Khwīsh Tāb*，*Zar-e Dastafshār*，*Zāyande Rūd*，*Zūre-ye Bāstānī* の 4 点も，*Dasātīr-e Āsmānī* のスタイルを踏襲して，以下のような虚構を設定している。

図 4：アーザル・カイヴァーン学派文献の虚構②

Title	Fictitious Prophet（s）	Fictitious Editor in the 6th Century	Persian Translator in the 16-17th Centuries	Contents
Khwīsh Tāb（*original title*：*Garzan-e Dānesh*）	47 Prophets（the *Dasatirian* Prophets and Ancient Persian Prophets）	Ḥakīm Pīshtāb, a disciple of Sāsān V	Mōbed Hūsh, by order of KayKhosrow Isfandiyār ibn Āzar Kayvān(9)	*Wājib al-Wujūd* and its Essence
Zar-e Dastafshār（*original title*：*Āzar Goshasp*）	40 Prophets（the *Dasatirian* Prophets and Ancient Persian Prophets）	Ḥakīm Hoshgūy, a disciple of Sāsān V	Dādpawayh ibn Hūsh Ā'īn(10), by order of KayKhosrow Isfandiyār ibn Āzar Kayvān	Mysticism
Zāyande Rūd	62 Prophets（the *Dasatirian* Prophets and Ancient Persian Prophets）	Ḥakīm Zende Ȧzarm, a disciple of Sāsān V	Mōbed Khūshī, by order of KayKhosrow Isfandiyār ibn Āzar Kayvān	Human Soul
Zūre-ye Bāstānī	Ibrāhīm Zardosht	Āzar Pazhūh, a disciple of Būdharj Mehr	−	Origin and End of the World, Time

これらの中で，*Khwīsh Tāb*，*Zar-e Dastafshār*，*Zāyande Rūd* の 3 作品は，「架空の古代ペルシアの預言者⇒サーサーン王朝時代の編者⇒ 16-17 世紀のペルシア語訳者」との *Dasātīr-e Āsmānī* の虚構を忠実に模倣している。*Dasātīr-e Āsmānī* との相違は，アースマーニー語本文もあった前提になっているものの，著作自体はペルシア語訳文（Pārsī-Pahlavī）だけで構成されている点である。また，この 3 作品は，ペルシア語の言葉遣いも不自然なほど一致する。更に，*Khwīsh Tāb* の 6 世紀の編者とされる Ḥakīm Pīshtāb(11)が，*Zāyande Rūd* の第 29 章，第 32 章，第 40 章に登場するなど，両者の間には密接な関連を窺える。これらに加えて，3 名の「訳者」とも，KayKhosrow Isfandiyār ibn Āzar Kayvān という人物に勧められて翻訳したとの執筆動機まで一致する。（この人物は，名前から類推するならばアーザル・カイヴァーンの息子である。しかし，*Shārestān-e Chahār Chaman* には登場するものの，*Dabestān-e Mazāheb* には見

当たらない。）この為，筆者は，*Khwīsh Tāb* と *Zāyande Rūd* の 2 点或いは *Zar-e Dastafshār* も含めた 3 点全てが，実際には同一人物によって執筆されたのではないかとの印象を強く受けている。

これに対して，*Zūre-ye Bāstānī* は，アーザル・カイヴァーン学派に特有の架空預言者や KayKhosrow Isfandiyār ibn Āzar Kayvān に言及せず，代わりにアブラハムとザラスシュトラを同一視した預言者「イブラーヒーム・ザルドシュト」の預言の内容を，サーサーン王朝時代の賢者アーザル・パジューフ・イスファハーニーがペルシア・パフラヴィー語（Pārsī-Pahlavī）に訳し，インドに送付したとの体裁をとる。こちらは，言葉遣いやスタイルの点から見て，*Khwīsh Tāb*，*Zar-e Dastafshār*，*Zāyande Rūd* の 3 作品とは明らかに別の著者による作品である。

これら 5 点以外の 3 タイトル（*Jām-e Kay Khosrow*，*Shārestān-e Chahār Chaman*，*Dabestān-e Mazāheb*）には，上記のような虚構が設けられていないので，16-17 世紀に執筆された通常のペルシア語文献として扱い得る。

図 5：虚構を用いないアーザル・カイヴァーン学派文献

Title	Author（s）	Contents
Jām-e Kay Khosrow	Poems by Āzar Kayvān and Commentary by Mōbed Khodājūy by order of KayKhosrow Isfandiyār ibn Āzar Kayvān	Mystical poem about Āzar Kayvān's Spiritual Journey
Shārestān-e Chahār Chaman	Farzāne Bahrām ibn Farhād Pārsī	History of Ancient Persia and Āzar Kayvān School
Dabestān-e Mazāheb	Mōbed Shāh / Dhū al-Fiqār al-Ḥusaynī al-Ardistānī	Hitory of 12 Religions（Zoroastrianism, Hinduism, Buddhism, Islam etc.）

このうち，*Jām-e Kay Khosrow* は，アーザル・カイヴァーンが自らの精神的ミゥラージュ（天界飛翔）を詠んだペルシア語詩に Mōbed Khodājūy が注釈を付した思想書で，全 4「ゴシャスプ」から構成される。その内訳は，黙示に関する第 1 ゴシャスプ，ガイバ界に関する第 2 ゴシャスプ，消滅の境地に関する

第 3 ゴシャスプ，隠滅の境地に関する第 4 ゴシャスプである。しかも，アーザル・カイヴァーンは各惑星の間を浮遊しながらこれらの精神的境地を体験したと述べ，文献の形式上，各惑星が預言者の周期を支配すると唱える *Dasātīr-e Āsmānī* と極めて類似している。両者を同一著者の作品と捉えることに疑問の余地はない。これが，*Dasātīr-e Āsmānī* をアーザル・カイヴァーンの著作と捉える文献上の根拠である。なお，注釈者の Mōbed Khodājūy は，「師であるアーザル・カイヴァーンの指導によって，これらの境地を完全に体得した」と述べている。

残る 2 冊 *Shārestān-e Chahār Chaman* と *Dabestān-e Mazāheb* は，非常に大部の歴史書＋同時代ドキュメントである。アーザル・カイヴァーン学派自体の歴史や学派の構成，個々の思想家の伝記（寧ろ讃仰文学）などの情報は，この 2 タイトルの内部資料に依拠している。

1-4. アーザル・カイヴァーン学派に関する先行研究

次に，先行研究を概観しよう[(12)]。アーザル・カイヴァーン学派に関する本格的な研究は，神智学協会（The Theosophical Society, 1875 年設立），パールスィーの神秘主義教団エルメ・フシュヌーム（Ilm-e Khshnoom, 1875 年開教），そこから派生したサーヘブ・デラーン（Sāheb Delān, Ervad Saheb Phiroze Masani が 1939 年に創立）による疑似宗教的活用を除けば，1930 年にスタートしている。そして，2014 年に至るまで，アーザル・カイヴァーン字派理解のフレームは，①ゾロアスター教文献としての理解⇒②スフラワルディーの照明学派文献としての理解⇒③同時代のヌクタヴィー教またはディーネ・イラーヒーとの関係で理解と，およそ 3 段階で変遷してきた。以下で，それらを参照しよう。

①　ゾロアスター教文献としての理解

始祖であるアーザル・カイヴァーンや高弟たちがゾロアスター教徒であると自称し，現存ペルシア語文献のうち 5/8 がサーサーン王朝時代末期に編集されたと装っているので，アーザル・カイヴァーン学派文献は当初はゾロアスター教文献の枠組みの中で理解されていた。その代表が，パールスィーの研究者 Jivanji Janshedji Modi の Modi 1930 である。この延長線上に，青木　2001 年や，Kianoosh Rezania の辞書項目論文 Rezania 2014[13]がある。

では，この理解は正しいだろうか？　この場合，アーザル・カイヴァーン学派文献の思想内容やスタイルを取り上げて，ヤズドやボンベイのゾロアスター教徒たちが伝承している文献の内容と比較する研究方法は，アーザル・カイヴァーン学派がゾロアスター教徒だと主張するにせよ，逆の主張をするにせよ，決め手にはならない。ゾロアスター教徒が伝統的な宗教思想に飽き足らず，革新的・逸脱的な新思想を考案する可能性が考えられるし，同様のことをイスラーム教徒が行った可能性もあり得るからである。どのような主張をするにせよ，文献上確実な証拠が必要である。

第 1 に吟味すべきは，アーザル・カイヴァーン学派文献の中に，16-17 世紀の著者たちがゾロアスター教徒であることを示す証拠があるかどうかである。そして，管見の及ぶ限り，アーザル・カイヴァーン学派文献の中には，『アヴェスター』やゾロアスター教パフラヴィー語文献の引用が一切存在していない。この事実は，ゾロアスター教神官に必須のアヴェスター語やパフラヴィー語の知識を，彼らが持っていなかったのではないかと推測させる。

しかし，伝統的ゾロアスター教ペルシア語文献の引用ならば，4 文献の中に 4 タイトルを確認できる。以下が，それらの引用箇所一覧である。

図 6：アーザル・カイヴァーン学派文献における伝統的ゾロアスター教文献の引用

Title	Quotated Zoroastrian Persian Book	Part
Dasātīr-e Āsmānī	*Zarātusht Nāme*	Ch. 13
ditto	*Changragāche Nāme* (*full Version*)	Ch. 13
Jām-e Kay Khosrow	*Zarātusht Nāme*	–

ditto	*Ardā Vīrāf Nāme*	–
Shārestān-e Chahār Chaman	*Ardā Vīrāf Nāme*	First Chaman
Dabestān-e Mazāheb	*Sad Dar-e Nazm*（*full Version*）	Ch. 1, Part 14

では，これらの引用は，直ちにアーザル・カイヴァーン学派がゾロアスター教徒だったとの事実を保証するだろうか？　上記の文献の書写伝統を分析すると，とてもそうは言えそうにない。即ち，筆者が確認した限りでは，以下の 2 つの伝統的ゾロアスター教ペルシア語文献が，イスラーム教徒の書写生によって筆写されているのである。

✓ 1788 年に Mullā Muḥammad Bāqir Peshandī が Dastūr ʻAlīqulī Khān の為に，*Zarātusht Nāme* を書写している。この写本は，テヘランのセパフサーラール写本図書館に，Tehran Sepahsālār Persian 2864/12 として現存している。

✓ ヒジュラ暦 13 世紀（西暦 18-19 世紀）に Muḥammad Muḥsin ibn Muḥammad Ḥusayn が，*Kitāb Zarātusht*（= *Zarātusht Nāme*）を書写している。この写本は，マシュハドのアースターネ・ゴドス・ラザヴィー写本図書館に，Mashhad Āstān-e Quds-e Razavī Persian 144/13 として現存している。

また，2013 年 10 月にロンドンで開催されたゾロアスター教学会での Daniel Sheffield の口頭発表によると，下記の写本もイスラーム教徒が書写したゾロアスター教ペルシア語文献である(14)。

✓ 1653-55 年にブハーラーで Muḥammad Qāsim ibn Muḥammad Jamāl al-Kābulī が，*Zarātusht Nāme*，*Changragāche Nāme*，*Ardā Vīrāf Nāme*，*Sad Dar-e Naẓm* の 4 冊を纏めて書写している。このコーデックスは，サンクト・ペテルブルク東洋写本図書館に，St. Petersburg National Library of Russia PNS 11 として現存している。

このように，伝統的ゾロアスター教ペルシア語写本の中でも，*Zarātusht*

Nāme，*Changragāche Nāme*，*Ardā Vīrāf Nāme*，*Sad Dar-e Nazm* の 4 点は，西暦 17 世紀までにはムスリムが書写し，その写本をムスリムが所有していた。そして，アーザル・カイヴァーン学派文献に引用された伝統的ゾロスター教ペルシア語文献は，完全にこの 4 冊と一致している。即ち，16-17 世紀に成立したアーザル・カイヴァーン学派文献が伝統的ゾロアスター教ペルシア語文献 4 点を引用している事実は，彼らがゾロアスター教徒であることを何ら保証しない。

これに対して，個別文献の事例になるが，*Shārestān-e Chahār Chaman* は，本文中では Ibn Sīnā，Fakhr al-Dīn al-Rāzī，Ghazālī，Shihāb al-Dīn Yaḥyā Suhrawardī，Ibn ʻArabī，Muḥaqqiq Tūsī，Nūrbakhsh，ʻAlā al-Dawlah Simnānī といったイスラーム教徒思想家の著作が，頻繁に言及されたり引用されたりしている。即ち，言及・引用という文献上の事実を数量的に計測するならば，Farzāne Bahrām の知的バックグラウンドは，ゾロアスター教思想よりもイスラーム思想によって占められているとの結論が得られる。

第 2 に，アーザル・カイヴァーン学派文献の写本の所蔵先に注目したい。彼らの写本は，実際にどの写本図書館で発見されているだろうか？　アーザル・カイヴァーン学派文献は，刊本出版後にかなりの量が書写されたらしく，インドのゾロアスター教系写本図書館（K. R. Cama Oriental Institute, Mumbai と First Dastur Meherjirana Library, Navsari）及びヤズドのイスラーム系写本図書館（Vezīrī Library）には，コロフォンを欠く写本が多数存在する。しかし，それらを捨象して，図 1 に示した各文献の刊本出版以前のコロフォンを持つ写本に限ると，ゾロアスター教系図書館に所蔵されているのは，K. R. Cama Oriental Institute R- Ⅷ -36 の *Dasātīr-e Āsmānī* 写本しか確認できない。しかも，本書は代々ゾロアスター教徒たちが伝世してきた写本ではなく，イランを旅行中の Mollā Kāʻūs 神官[15]が，1779 年にイスファハーンの古書店 Āqā Moḥammad Ṭāher で購入して将来した写本に過ぎない。

また，筆者が確認した範囲では，K. R. Cama Oriental Institute H.P.131の*Dasātīr-e Āsmānī*写本が，「ヒジュラ暦357年（＝西暦968年）にFarāzīn Hūsh Dāvarが書写した」とのコロフォンを持つ。しかし，西暦13世紀に作成された*Zarātusht Nāme*を引用している*Dasātīr-e Āsmānī*が，西暦10世紀に成立していたとする立論には，成立の余地がない。これは，コロフォン自体が偽造されている例である。因みに，ここで書写生とされるFarāzīn Hūsh Dāvarは，アーザル・カイヴァーン学派文献の中では，*Dārā-ye Iskandar*という文献（未発見）の著者とされている（図8の2-2参照）。何故彼を*Dasātīr-e Āsmānī*の書写生に擬したのか，この偽造写本のコロフォン作成者の意図が不明である。

そして，この2点以外のアーザル・カイヴァーン学派文献の写本は，全てイランとインドのイスラーム系写本図書館で発見されている。即ち，アーザル・カイヴァーン学派文献の写本は，伝統的ゾロアスター教ペルシア語文献4点を引用しているものの，その4点ともイスラーム教徒がアクセス可能であった。また，純粋にゾロアスター教系写本図書館で伝世されてきたアーザル・カイヴァーン学派文献写本は確認されていない。寧ろ，引用の数や写本の所蔵先としては，イスラーム文献やイスラーム系写本図書館の方が遥かに多い。これらの文献学的・書誌学的事実に照らせば，アーザル・カイヴァーン学派文献をゾロアスター教文献だとする所説は，何ら実証的な根拠を持たないだろう。

② スフラワルディーの照明学派文献としての理解

必ずしもこのような文献的データに依拠して判断した訳ではなさそうだが，20世紀後半に出現したのが，スフラワルディーの照明学派のゾロアスター教版としての理解である。フランスのイスラーム学者Henry Corbin（d. 1978）がこの説を唱えて以降（代表的な概説としては，辞書項目論文であるが，Corbin 1989），Fatḥ Allāh Mojtabā'ī（Mojtabā'ī 1989。現在までの概説の中では最も詳細である），Seyyed Hossein Nasr（多数のイスラーム思想概説の中で言

及），Kevin Shepherd（Shepherd 1988），Takeshi Aoki（Aoki 2001a；2001b）などが追随した。

では，この理解は正しいだろうか？　確かに術語レベルでは，アーザル・カイヴァーン学派文献には，Nūr al-anwār = shīd-e shīdān といった照明学派のアラビア語用語の「純粋ペルシア語訳」が著しく浸透している。しかし，術語の導入は思想構造の一致を意味しない。仮にアーザル・カイヴァーン学派の中心思想が図 3 に示した *Dasātīr-e Āsmānī* で表明されていると仮定して，これを照明哲学と比較してみよう。筆者が読みとる限りでは，*Dasātīr-e Āsmānī* の思想は下記を骨子としている。

- ✓ 宇宙は全 9 天圏によって構成され，それぞれに七惑星と太陽・月が対応している。
- ✓ 第 1 天の下の月下界[16]には，古代ペルシアの預言者が周期的に降臨する
- ✓ 人間は各惑星をアースマーニー語の呪文で讃えなくてはならない
- ✓ キリスト教，マーニー教，マズダク教，イスラームなどは邪教であり，古代ペルシアの予言者の教えこそ正しい
- ✓ 上記の内容を，人工言語を考案して偽造聖典に書き記している
- ✓ その虚構を，弟子たちもそれぞれに踏襲して，形式上の偽造文献を大量に生み出した

これに対して，現在知られているところでは，照明学派の思想は，認識の極としての自己認識「現前の知識」を基盤とし，最高存在である「光の光」の認識に至る本質直観の哲学と捉えられている。このように，*Dasātīr-e Āsmānī* 及び他のアーザル・カイヴァーン学派文献が照明学派の術語を意図的に導入しているのは事実であるが，思想構造がここまで乖離するとなると，アーザル・カイヴァーン学派をゾロアスター教照明学派と説明する Corbin の理解には，再考の余地がある。

また，上述の術語以外に Corbin が有力な論拠とした文献学的事実は，*Shārestān-e Chahār Chaman* の中で，Farzāne Bahrām ibn Farhād（d. 1638）がスフラワルディーのアラビア語文献全巻をペルシア語訳したとの証言である（Corbin 1989, p. 186）。しかし，筆者がイランとインドのイスラーム系写本図書館を調査した範囲内では，それに該当する写本は発見できなかった。少なくとも，この数行の証言だけでアーザル・カイヴァーン学派と照明学派の間に文献上の影響関係を過大に想定するのは危険である。

以上，アーザル・カイヴァーン学派は，照明学派特有の術語を使用してはいるものの，思想構造の点では全くの別物と見るべきである。両者の間には，術語の貸借以上の具体的な「影響関係」は，今のところ見出せない。

③　同時代のホルーフィー教・ヌクタヴィー教との関係で理解

2000 年代に入ると，アーザル・カイヴァーン学派の著作をゾロアスター教文献や照明学派文献としては理解し難いことが判明し，アーザル・カイヴァーン学派と同時代の思想潮流との関係を吟味する研究が出現した。Aoki 2002 と青木　2002 年 a は，アーザル・カイヴァーン学派の思想的特徴を救世主論に求め，ディーネ・イラーヒーとの影響関係を想定した。青木　2002 年 b は，*Jām-e Kay Khosrow* の中に，ヌールバフシュ教団の影響を読み込もうとした。アーザル・カイヴァーン学派に関する専論ではないが，Kathryn Babayan, Sādiq Kiyā，Abbas Amanat などは，16 ～ 17 世紀のイランの思想潮流の中で，アーザル・カイヴァーン学派とヌクタヴィー教[17]との関係を想定した。その代表例は，Babayan 2002 の中に見出せる。

これらの研究成果を継承して，2010 年代に最も活発にアーザル・カイヴァーン学派研究を行っているのが，Daniel Sheffield である。彼によると，イラン・インドで人造言語による聖典 *Dasātīr-e Āsmānī* が出現したのと同時期に，オスマン帝国でも Muḥyī al-Dīn Gulshānī（1528-1604）が人造言語 Baleybelen 語の

辞書 *Kitāb Aṣl al-Maqāṣid wa Faṣl al-Marāsid* を編纂しており，両者の同時代性は偶然とは考えられない。そして，16 ～ 17 世紀のイラン・インドとオスマン帝国では，ホルーフィー教・ヌクタヴィー教の文字神秘主義思想が大きな影響力を持ち，近年のイスラーム研究によれば，詩人では Amrī（16C blinded by Shah Tahmasp），Fayzī（上述の Abū al-Fayz ibn Mubārak と同一人物），Muḥammad ʻUrfī Shīrāzī（1555-91），Mīr ʻAlī Akbar Tashbīhī Kāshānī（16C），Yuqūʻī など，思想家では Ṣāʼin al-Dīn Turkah Isfahānī（1369-1432），ʻAbd al-Raḥmān al-Bistāmī（1388-1455），Jalāl al-Dīn al-Dawwānī（d. 1503）などが同派に属していたとされる。もちろん，Muḥyī al-Dīn Gulshānī が人造言語の書物を著わした背景にも，ホルーフィー教・ヌクタヴィー教の文字神秘主義の影響が想定される。即ち，Muḥyī al-Dīn Gulshānī とアーザル・カイヴァーンを繋ぐのはホルーフィー教・ヌクタヴィー教であり，アーザル・カイヴァーン学派も同派の一種として捉えられるべきであるとする（Sheffield 2014a 参照）。

確かに，16 ～ 17 世紀のイスラーム世界全体の思想潮流という観点から，状況証拠を博捜して組み立てた Sheffield の立論は説得的である。特に，*Dasātīr-e Āsmānī* の人造言語の由来を説明する上では，これ以上魅力的な仮説は提示されていない。しかし，これでもまだ説明し切れない部分が残されている。第 1 に，①でも吟味した文献上の引用の確率の問題である。数量的な問題に還元してしまうようだが，筆者が気付いた範囲内では，アーザル・カイヴァーン学派文献中でヌクタヴィー派に言及している箇所は，*Shārestān-e Chahār Chaman* の石版刷り p. 628 と，*Dabestān-e Mazāheb* の 1983 年版刊本 pp. 276-77 の 2 ヶ所だけである。しかも，何れもヌクタヴィー教の創始者 Maḥmūd Pasīkhvānī（d. 1427）の簡単な伝記に過ぎない。また，図 7 の 1-9 で名前が挙がっている *Jāvedān Kherad* をホルーフィー教の始祖 Faẓl Allāh Astarabādī の同名著作と考えることもできるが，現物が存在しない以上，これは単なる推測の域を出ない。即ち，仮にアーザル・カイヴァーン学派がヌクタヴィー教の影響圏に

あるとすれば，彼らの文献にヌクタヴィー教の思想や著作に関して踏み込んだ記述がない事実をどう説明するのか？

第 2 に，②でも吟味した思想構造上の問題がある。もちろん，思想構造の類似は如何なる客観的事実も証明しないが，逆に類似していないとなると，両者の無関係性を強く支持するだろう。そして，*Dasātīr-e Āsmānī* の内容を軸としてみた場合，アーザル・カイヴァーン学派の思想的特徴は，上述の②のように纏められる。筆者としては，少なくともアーザル・カイヴァーン学派の

α「天体信仰」

β「周期的預言者論」

γ「ペルシア民族主義」

σ「人造言語と偽造聖典」

の 4 つの論点を同時に説明できない限り，思想的な源泉を特定できないと考える。筆者はホルーフィー教・ヌクタヴィー教の文献を正確に読んでいる訳ではないが，数字や文字の発音に関する神秘主義的考察と救世主思想を核とする彼らの思想は，α の部分を説明できないように感じられる。

1-5. アーザル・カイヴァーン学派に関する現在の研究状況

上述のように，アーザル・カイヴァーン学派を歴史的・思想史的文脈に正確に位置付けようと試みる研究は，北米の研究者の間で行われている。これに対して，ドイツ語圏の研究者の間では，アーザル・カイヴァーン学派の個別文献の校訂を試みる研究が進められている。（そして，筆者が知る範囲では，北米とドイツ語圏の研究は，ほぼ没交渉である。）現在筆者が把握している限り，2014 年段階で以下の 5 作品の校訂作業が進行中である。

1. ボン大学イスラーム学研究所の博士課程に在籍する Malihe Karbassiān は，*Jām-e Kay Khosrow* の校訂で博士論文を執筆中である。同時に，*Dasātīr-e Āsmānī* の新校訂も準備中である

2. ゲッティンゲン大学大学院古代イラン学博士課程に在籍する Mahsa Tavānā は，*Khwīsh Tāb* の校訂で博士論文を執筆中である
3. バイロイト大学宗教学科助教 Robert Langer は，*Dabestān-e Mazāheb* の新校訂を準備中である
4. ゲッティンゲン大学古代イラン学科研究員の Kianoosh Rezāniā と青木が共同で，*Zūre-ye Bāstānī* の校訂を準備中である

2014 年 9 月には，これらの校訂作業の共通理解を深め，相互に写本情報を交換するべく，ボン大学イスラーム研究所の Eva Orthmann 教授が主催者となり，Malihe Karbassiān，Kianoosh Rezāniā（以上，ドイツ），Mahsa Tavānā（スイス），Takeshi Aoki（日本）が発表者となって，ボン大学でアーザル・カイヴァーン学派研究ワークショップが開催された。その結果，個々の発表以外に，総論として下記のような情報と合意が得られた。

① アーザル・カイヴァーン学派に関する新出資料

アーザル・カイヴァーン終焉の地パトナーには，現在までのところ，アーザル・カイヴァーン学派の活動に関する如何なる痕跡も発見されていなかった。しかし，近年，パトナー近郊でアーザル・カイヴァーンの墓廟（maqbare）が発見されたとの報告があり，その写真が公開された。一見真新しい墓廟なので，筆者は依然確信を持てないでいるが，この情報が正確だとしたら，アーザル・カイヴァーンの宗教思想（ゾロアスター教徒は曝葬用の dakhmah を用いる）やパトナーにおける教団本部の立地条件まで推定し得る貴重な発見である。

また，上述のように，*Dabestān-e Mazāheb* にはかなり多数の写本が存在し，校訂が非常に困難であった。しかし，近年，デリーの写本図書館において，ヒジュラ暦 1060 年（＝西暦 1651/2 年）のコロフォンがあるモッラー・モーベド・シャーの autography が発見されたとの報告があり，コロフォン部分だけ公開された。この autography は，既存の写本や刊本とは大幅に異なり，ヌクタヴィー

教への言及箇所がかなり散見されるという。この情報が正確だとしたら，既存の研究のアーザル・カイヴァーン学派情報は大幅な修正を要請される。

② *Dasātīr-e Āsmānī* の新理解

Dasātīr-e Āsmānī のアースマーニー語の文法的分析によると，第 1 預言者のマハーバード章と第 13 預言者のザルドシュト章のアースマーニー語本文部分には特定の文法の痕跡が見出されるが，他の預言者章にはほぼ文法構造が認められない（図 3 参照）。従って，*Dasātīr-e Āsmānī* の構成上は，第 1 預言者章及び第 13 預言者章のアースマーニー語本文と残余の部分は，別個の著者によって書かれたか，同一の著者によって別々の時期に執筆された可能性が考えられる。

また，*Dasātīr-e Āsmānī* のアースマーニー語の語彙の分析によると，20 世紀におけるマーニー教イラン語文献発見以前の古風なパフラヴィー語発音をペルシア語表記した単語が見出される。これが正しいとすれば，アーザル・カイヴァーンは草書体パフラヴィー文字の解読能力があったか，或いは解読能力がある人物と親交を結んでいたと考えられる。前者のケースではアーザル・カイヴァーンはゾロアスター教神官と確定されるし，後者のケースではイランのヤズド・ケルマーン地域かインドのナヴサーリー地域と深い関係があったイスラーム教徒と推定される。

③ スフラワルディーの惑星崇拝に関する指摘

照明学派とアーザル・カイヴァーン学派の思想的類似性の問題に関して，オブザーバーとして参加していたボン大学イスラーム研究所研究員の Mohammad Karīmī Zanjānī Asl 氏から，スフラワルディーの惑星讃仰詩や祈祷文の校訂出版を進めているとの情報が寄せられた。スフラワルディーのアラビア語讃仰詩や祈祷文の存在は，弟子による文献目録から知られていたが（Spies

1935)，それらの内容が惑星讃仰であるとは今まで判明していなかった。この情報が正確だとしたら，照明学派そのものの理解についても再考が必要となる。

また，*Dasātīr-e Āsmānī* の「ペルシア語翻訳」部分の一部は，スフラワルディーのアラビア語著作の逐語訳になっているとの報告もなされた。残念ながら，どの著作の部分が対応しているのかについては，執筆中の博士論文の内容に触れるとのことで言及がなされなかったが，もしもこの情報が正しいとしたら，照明学派の思想中の惑星崇拝的な部分がアーザル・カイヴァーン学派によってクローズアップされた可能性が浮上する。

④　ヌクタヴィー教との比較に対する批判

21 世紀以降，北米の研究者たちはアーザル・カイヴァーン学派の起源を説明する際にしばしばヌクタヴィー教の影響を指摘するが，教祖 Maḥmūd Pasīkhvānī の著作 16 冊は現在までのところ 1 点も校訂されておらず，彼らの思想内容自体がよく知られていない（例えば，Barzegar 2013 参照）。上述の Karīmī Zanjānī Asl 氏は，Maḥmūd Pasīkhvānī の著作の新出写本を活用してヌクタヴィー教に関する博士論文を執筆中だと承ったが，上記の論が組み立てられている段階では，ヌクタヴィー教の判明度とアーザル・カイヴァーン学派の判明度はほぼ同程度である。つまり，歴史上不明なものを同程度に不明なものによって説明しようとする「循環論法」で，信頼できる研究成果とは言い難いとの指摘がなされた。

このように，既知のアーザル・カイヴァーン学派文献の精読，既存のイスラーム思想潮流との対照と分析，更には今後の文献的基礎の拡充とともに，アーザル・カイヴァーン学派に関する評価も変動するものと予想される。

2．『ダースターネ・モーベダーン・モーベド・ダーダール・ダードドフト』研究

2-1. 未発見のアーザル・カイヴァーン学派文献 36 点

アーザル・カイヴァーン学派に関する概論と 2014 年現在の研究状況の見取り図は，以上の通りである。では，筆者がアーザル・カイヴァーン学派研究に貢献できるとすれば, どのような部分だろうか？　実は, アーザル・カイヴァーン学派に関する研究の文献的基礎は，19 世紀以来，図 1 に示した 8 タイトルのペルシア語文献に限定されており，この範囲から全く動いていない。上記のドイツ語圏の研究も，この 8 タイトルの文献学的精度を高める方向でなされている。ゾロアスター教ペルシア語文献の概説としては異例なほど多くのページをアーザル・カイヴァーン学派文献の解説に割いている最新の概説 Sheffield 2014b[(18)] も，従来通り 8 タイトルしか挙げていない。

しかし，筆者が整理したところでは，想定されるアーザル・カイヴァーン学派のペルシア語文献の合計は，44 タイトルに達する。即ち，*Shārestān-e Chahār Chaman* で言及されるアーザル・カイヴァーン学派文献が 24 点，*Dabestān-e Mazāheb* で言及されるアーザル・カイヴァーン学派文献が 20 点である。もちろん，何点かは重複があると予想されるが，それらを度外視して，Mojtabāʾī 1989, p. 249 を参照しつつ作成したタイトルと著者の一覧表が，下記の図 7 と図 8 である。

図 7：*Shārestān-e Chahār Chaman* で言及されるアーザル・カイヴァーン学派文献 24 点

Nr	extant	Title	Author
1-1	× [(19)]	*Āʾīne-ye Iskandar*	Āzar Kayvān
1-2	× [(20)]	*Takht-e Tāqdīs*	Āzar Kayvān
1-3	× [(21)]	*Partov Farhang*	Āzar Kayvān
1-4	×	*Nehād-e Mōbedī*	–

1-5	×	*Farhād Kerd*	–
1-6	×	*Awrand Nāme-ye Pīshdādī*	–
1-7	×	*Tahmūras Nāme*	–
1-8	×	*Nāme-ye Ā'īn Dād*	–
1-9	×	*Jāvedān Kherad*	–
1-10	×	*Nasb Nāme-ye Shāhān*	–
1-11	? (22)	*Nāme-ye Shīdestān*	Āzar Pazhūh
1-12	×	*Shokūh Fazā*	–
1-13	×	*Farhād Nāme / Nāme-ye Farhād*	–
1-14	×	*Ā'īne-ye Ā'īn*	Jāmāsp Hakīm
1-15	×	*Farāzdegān*	Āzād Sarv
1-16	×	*Nasā'ih al-Mulūk*	Āzar Mehr
1-17	×	*Dārāb Nāme*	–
1-18	×	*Dānesh Afzā-ye Nūshīravān*	Būdharj Mehr
1-19	×	*Kharrād Nāme*	–
1-20	×	*Dānesh-e Ferūz*	–
1-21	? (23)	*Golestān-e Dānesh*	Āzar Pazhūh ibn Āzar Ā'īn
1-22	×	*Golestān-e Bīnesh*	Kharrād ibn Ā'īn-e Goshasp
1-23	×	*Rahbarestān*	Kharrād Borzīn
1-24	×	*Jāmāspī*	–

図 8：*Dabestān-e Mazāheb* で言及されるアーザル・カイヴァーン学派文献 20 点

Nr	extant	Title	Author
2-1	○	*Dasātīr-e Āsmānī*	–
2-2	×	*Dārā-ye Iskandar*	Dāvar Hūryār
2-3	×	*Jashn Sade*	Mōbed Hūshyār
2-4	×	*Sorūd-e Mastān*	Mōbed Hūshyār
2-5	○	*Jām-e Kay Khosrow*	Mōbed Khodājūy
2-6	○	*Shārestān-e Chahār Chaman*	Farzāne Bahrām
2-7	○	*Zar-e Dastafshār*	Mōbed Sorūsh
2-8	×	*Nūshdār*	–
2-9	×	*Sekangabīn*	Mōbed Sorūsh
2-10	×	*Bazmgāh*	Farzāne Khūshī (24)
2-11	×	*Arzhang-e Mānī*	Farzāne Bahrām-e Kūchek
2-12	×	*Tabīre-ye Mōbedī*	Mōbed Parastār
2-13	×	*Ramzestān*	–
2-14	×	*Bāstān Nāme*	–
2-15	×	*Rāz Ābād*	Shams al-Dīn Shīdāb

2-16	×	*Peymān Farhang*	−
2-17	×	*Andarz-e Jamshīd be Ātabīn*	Dastūr Jāmāspī
2-18	×	*Samrād Nāme-ye Kāmkār*	Samrādiyān
2-19	×	*Āmīghestān va Akhtarestān*	Sepāsiyān
2-20	×	*Persian Translation of Shihāb al-Dīn Suhrawardī' s Arabic Books*	Bahrām ibn Farshād（ = Farzāne Bahrām-e Kūchek）

また，現存する 8 タイトル（図 1 参照）の中で，同時代ドキュメントである *Shārestān-e Chahār Chaman* でも *Dabestān-e Mazāheb* でも言及されていない文献は，Mōbed Hūsh の *Khwīsh Tāb*，Mōbed Khūshī の *Zāyande Rūd*，Āzar Pazhūh の *Zūre-ye Bāstānī* の 3 タイトルである。なお，*Dabestān-e Mazāheb* は，アーザル・カイヴァーン学派文献の最末期に属するので，他の文献で言及される可能性がなく，ここでの考察からは除外する。

このうち，Mōbed Hūsh が Mōbed Hūshyār に該当するとしたら，*Jashn Sade*（2-3）か *Sorūd-e Mastān*（2-4）が *Khwīsh Tāb* の別名である可能性がある。また，Mōbed Khūshī が Farzāne Khūshī に該当するとしたら，*Bazmgāh*（2-10）が *Zāyande Rūd* の別名である可能性がある。更に，Āzar Pazhūh の著作とされる *Nāme-ye Shīdestān*（1-11）か *Golestān-e Dānesh*（1-21）のどちらかが *Zūre-ye Bāstānī* の別名である可能性がある。

だが，仮に既発見の文献全てがここに含まれているとしても，44 − 8 = 36 タイトルのアーザル・カイヴァーン学派文献が未発見・未研究のままである。もちろん，この全てが現存していると考えるのは楽天的過ぎるだろうが，本稿はこの欠を埋め，新たなアーザル・カイヴァーン学派文献写本の提示と，拡大された文献学的基礎に依拠したアーザル・カイヴァーン学派論の再構築を目的としている。

2-2. アーザル・カイヴァーン学派文献としての指標

その前に，どのような写本を以てアーザル・カイヴァーン学派文献と確定さ

せるか，その指標を予め定めなくては，この研究も「循環論法」に陥るであろう。そこで，既存の 8 文献から，筆者が考える指標を大項目で 3 つ，小項目で 6 つ挙げてみよう。

①イラン民族主義

アーザル・カイヴァーン学派文献の思想内容を規定する最大の方向性は，筆者からすればイラン民族主義である。ここでいう「民族主義」とは，近現代史の文脈で語られるものとは違い，当時のイスラーム社会の枠組みにあって，イスラーム以前の古代イラン文化の優越性を説く思想としたい[25]。しばしば，イランにおける軍事的叛乱の論理として，13 世紀以前は古代イラン的な表象が用いられ，ポスト・モンゴル期以降はシーア派的な表象が用いられると分析される。しかし，ヌクタヴィー教が有力な反証となっているように，16 世紀にあっても古代イラン的な表象が生命力を保っていたようである。

但し，16 ～ 17 世紀には，肝心の優越性の核となるべき「古代イラン文化」の実質が殆ど知られておらず（イスラーム以前の古代イラン文化の実態が判明するのは，19 世紀後半にヨーロッパでイラン学が発展してからである），アーザル・カイヴァーン学派は，この民族主義的希求を満たす為の方策として，「古代イラン文化」の内容を自ら創出せざるを得なかった。その為に，下記のような方策が採られている。

1. フィクション上の古代イラン預言者・賢者の創出
2. 人造言語アースマーニー語の創出
3. 人造言語による聖典の創出

このうち，人造言語の創出とその人造言語による聖典の創出は，先行するヌクタヴィー教の中に例を見出せる。だが，同時にゾロアスター教のアヴェスター語と『アヴェスター』の関係との類似性も指摘できるので，議論が複雑化する要因となっている。即ち，①-1 ～ 3 は，「ゾロアスター教 or ヌクタヴィー教

⇒アーザル・カイヴァーン学派」という思想史的文脈を想定した場合の指標である。

②惑星崇拝と周期的時間観念

イラン民族主義展開の上では必ずしも必要とは思われないアーザル・カイヴァーン学派の思想の特徴として，惑星崇拝と周期的時間観念が挙げられる。各惑星の周期が，その惑星に固有の古代イラン預言者の降臨を促すとの発想である。

4. 惑星崇拝

5. 惑星に支配された周期的時間観念

これらは，惑星を悪の勢力の創造物と見做したパフラヴィー語文献を基準とすれば，明らかにゾロアスター教に直接のルーツを持たない[26]。先行する近縁亜種の思想を辿れば，おそらくはヌクタヴィー教に行き着くだろう。更に，論証を欠く印象だけを述べるならば，各惑星が各々フィクション上の古代イランの預言者の周期に対応している点では，流出論の中で「預言者＝知性＝惑星」の 3 者を同一視したイスマーイール派の思想家ハミードゥッディーン・キルマーニー（996-1021 年）との関係も想定し得る。即ち，② -4 ～ 5 は，「イスマーイール派⇒ヌクタヴィー教⇒アーザル・カイヴァーン学派」という思想史的文脈を想定した場合の指標である。

③スフラワルディーの惑星崇拝と照明学派的術語

予告されているスフラワルディーの惑星讃仰詩の校訂版が出版されていない現状では，照明学派とアーザル・カイヴァーン学派の思想内容の比較は単なる仮説にとどまる。ただ，思想構造上の影響関係の有無に拘わらず，スフラワルディー的な術語（のペルシア語訳）がアーザル・カイヴァーン学派文献中に頻出していることは事実である。これらは，ゾロアスター教にもヌクタヴィー教

にも見出せない特徴である。そこで，

6. スフラワルディーの術語の純粋ペルシア語訳

も，アーザル・カイヴァーン学派文献を見定める指標とし得る。即ち，③-6 は，「スフラワルディーの惑星崇拝 or 照明学派的術語⇒アーザル・カイヴァーン学派」という思想史的文脈を想定した場合の指標である。

以上，現存 8 タイトルの中でも，①～③に挙げた 6 項目に完全に当て嵌まらない文献はある。例えば，*Zūre-ye Bāstānī* には，フィクション上の古代イランの預言者が登場せず，「イブラーヒーム・ザルドシュト」の単独預言としての構成が採られている。また，惑星崇拝の痕跡も見受けられない。しかし，スフラワルディーの術語を用いつつ,「古代イランの叡智」を語る点では, 本書はアーザル・カイヴァーン学派文献に分類され得る。おそらく，時代が下るにつれて，教祖アーザル・カイヴァーンの思想のどの部分を継承するかによって，各文献の間で差が出たのだと考えられる。

従って，筆者としては，16 ～ 17 世紀に執筆されたペルシア語文献の中で，教祖アーザル・カイヴァーンに淵源する 1 ～ 6 の特徴の半数以上を文献中で確認でき，それがイラン民族主義という最終目的を志向しているのであれば，その文献はかなりの確率でアーザル・カイヴァーン学派文献と判定可能だと考えている。また，どの指標の比率が多いかを測定することによって，アーザル・カイヴァーンの複合的なルーツのどの部分がどの弟子たちに影響を与えたかを弁別できるだろう。

2-3. *Dāstān-e Mōbedān Mōbed va Keyfīyat-e ān* の写本・刊本情報とその評価

本稿で新出アーザル・カイヴァーン学派文献として取り上げるのは，*Dāstān-e Mōbedān Mōbed va Keyfīyat-e ān*（以下，*Dāstān-e Mōbedān Mōbed* と略）と題された近世ペルシア語リサーラである。このリサーラには，2012 年以前までに確認された範囲内では，下記の Nr. 2-Nr. 6 の写本の存在が知られていた。

それらに，2012 年に確認された Nr. 1 の写本も加えて，推定上の書写年代順にそれぞれのタイトル，コーデックス，書写年代，書写生に関する情報を纏めた表が図 9 である。

図 9：*Dāstān-e Mōbedān Mōbed va Keyfīyat-e ān* 写本情報の整理

Nr	Title	Codex	Date	Copyist
1	*Dāstān-e Mōbedān Mōbed va Keyfīyat-e ān*	Majles 13522/4 (Tehran), fol. 50v-fol. 88r	ca. 1014 Jalālī (= 1635CE)	Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsp
2	*Ketāb-e Dādār ebn-e Dāddokht*	Staatbibliothek M52 (München), fol. 213r-fol. 188v	1179 Yazdejerdī (= 27th, January, 1809CE)	Dārā Shāh Valad-e Mehrabānjī
3	–	British Museum Or. 8994 (London), fol. 104-fol. 139	West supposed the 19C CE	–
4	*Rāste*	Bhandarkar Institute (Poona), Bh19	–	–
5	*Ārāste* or *Ketāb-e Dādār ebn-e Dāddokht*	First Dastoor Meherjirana Library (Navsari), F52, fol. 188-fol. 213	1247 Yazdejerdī (= 1877CE)	Īraj Dastūr Sohrābjī ebn-e Dastūr Kā'us
6	–	Mulla Feroz Library (Mumbai), R269	–	–

次に，各写本を発見順に解説しよう。最初に発見された写本は Nr. 2 で，1866 年に Martin Haug（d. 1876）がインドから持ち帰り，ミュンヘン王立図書館に寄贈した MH Codex 7 である。（現在は M Codex 52 と改称）に収められている。典拠は Bartholomae 1915, pp. 72-92 で，検索する際は 1915 年段階の情報「ミュンヘンの宮廷・州立図書館の「ゼンド写本」の 52 番 /Haug 7 コレクションの第 16 論文 ff. 122-213，ドイツ語タイトル "Das Buch des Dādār bin Dādduxt"」で申請しないと，このコーデックスには到達しない。その後，Edward West（d. 1905）が，大英図書館所蔵 Or. 8994 に同じ文献が収録されていることを突き止めた（West 1896-1904，pp. 123-124）。これが Nr. 3 の写本である。

それから100年近く経った1996年には，Carlo Cereti（1960-）がインド・マハーラーシュトラ州プーナのバンダルカル研究所でNr. 4を発見し（Cereti 1996），2003年には，青木がNr. 5に当たるMeherjirana Library F52写本とNr. 6に当たるMulla Feroz Library R69写本について報告した（青木　2003年，p. 2 and p. 8。いずれも青木　2007年，p. 294 and p. 304に再録）。

これらを受けて，2004年にはRahām AshaとMas'ūd Mīrshāhīがの合計5写本を用いて，校訂版を準備した（Asha and Mīrshāhī 2004）[27]。（細かいことだが，校訂者たちはNr. 6写本のMulla Feroz Libraryに於ける分類番号をR-269と表記しているが，R-69の間違いではないかと思う。青木　2003年，p. 8とAsha and Mīrshāhī 2004, p. 14を比較参照）また，校訂版出版後の2012年には，青木がNr. 1写本のコーデックス・データについて報告した（青木　2012年，pp. 142-139）。

では，その校訂版によって，*Dāstān-e Mōbedān Mōbed*はどう評価されているだろうか？　Asha and Mīrshāhī 2004は，本書をサーサーン王朝時代初期のパフラヴィー語文献のペルシア語訳として高く評価し，解説部分では他のパフラヴィー語文献，サンスクリット語文献，ギリシア語文献との比較を試みている。また，ゾロアスター教ペルシア語文献に関する最も纏まった概説であるSheffield 2014bも，*Dāstān-e Mōbedān Mōbed*の題名を*Ārāste-ye Dādār b. Dādhūkht*とエメンドした上で，本書を「シャープール1世王の宮廷で，大神官ダードゥーフトの息子ダーダールと，ローマ皇帝Abūlniyūsh（アポロニウスか？　但し，このような名前のローマ皇帝は歴史上存在しない）が派遣した賢者たちとの論争の記録で，パフラヴィー語原本からペルシア語に訳された」と評価している。

しかし，筆者はこの評価を大変疑問に感じている。*Dāstān-e Mōbedān Mōbed*はサーサーン王朝初期に当たるシャーブフル1世時代（在位240-270年）に執筆されたパフラヴィー語原本のペルシア語訳との体裁をとってはいるが，王朝

初期に作成されたパフラヴィー語文献は現在まで一例も知られていない。パフラヴィー語文献の執筆年代をどんなに早くとっても，王朝後期のホスロー 1 世時代（在位 531-79 年）に遡るのが限界である。また，内容的には，*Dāstān-e Mōbedān Mōbed* は上記 1 ～ 6 の「アーザル・カイヴァーン学派文献としての指標」のうち，少なくとも 1，2，6 を満たしている。更に，筆者が読んだ限りでは，イスラーム思想の影響としか思えぬ表現と内容が頻出しており，これをサーサーン王朝初期の作品とするには無理があり過ぎる。筆者としては，この手の込んだ虚構から見て，*Dāstān-e Mōbedān Mōbed* は上記の 36 タイトルの未発見のアーザル・カイヴァーン学派文献の 1 冊が，書写生によって別タイトルを付与された写本なのではないかと推測したい。

2-4. Majles 13522/4（Tehran）写本の書写生

次に，Majles 13522/4（Tehran）写本の書写生を検討しよう。筆者は既に 2012 年の報告（青木　2012 年，p. 140）に於いて，Majles 13522/4（Tehran）が，「ジャラーリー暦 1014 年ホルダード月シャフレーヴァル日（＝西暦 1635 年 6 月上旬）」から数ヶ月以内に，Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsp によって書写されたと考えられることを述べた。では，Majles 13522/4（Tehran）の書写生 Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsp とは何者であろうか？　本文中のペルシア語単語を敢えて草書体パフラヴィー文字で書き換えている点から，彼はアーザル・カイヴァーン学派のメンバーのような「自称ゾロアスター教神官」ではなく，正規のパフラヴィー語教育を受けた由緒正しいゾロアスター教神官と考えられる。アーザル・カイヴァーン学派文献の写本の書写生は，多くの場合イスラーム教徒と想定されるので，このような正規のゾロアスター教神官による書写は非常に珍しい。しかし，

・1899 年までのインド・ナヴサーリーのバガリアー系神官団の家系図を集成した Meherjirana 1899[28]

・1940年段階までの在ヨーロッパのゾロアスター教写本のコロフォンを集成した Unvala 1940

・2012 年までにイランで新発見された『アヴェスター』写本 97 点のコロフォンを集成した Cantera 2012[29]

の 3 点の資料には，Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsp に関する情報を見出せない。即ち，彼はインド系の有力神官家系に属してはいないし，かなりの確率でイランにおける『アヴェスター』の書写にも関与していないと判断できる。

次に，1478 年から 1773 年にかけて 19 ～ 22 点（宗派別の数え方によって差がある）作成されたイラン系神官団とインド系神官団の往復書簡（図 10 参照）を検討してみよう。これらの書簡の中には，差出人であるインド系ゾロアスター教神官団の有力者と，回答者であるイラン系ゾロアスター教神官団の有力者が集団でサインしているので，各書簡が作成された年代ごとのゾロアスター教徒有力者の個人名を知る手掛かりになる。

図 10：1478 年から 1773 年にかけて作成された往復書簡のリスト[30]

Nr	Date	Name of Revāyat
1	1478	Revāyat of Narīmān Hōshang
2	1511	Revāyat
3	1516	Revāyat of Behdīn Jāsā
4	1520	Revāyat of Esfandiyār Sohrāb
5	1527	Revāyat of Shāpūr Āsā
6	1535	Revāyat
7	1558	Revāyat of Kāmdīn Shāpūr
8	?	Revāyat of Kā'ūs Kāmdīn
9	1570 or 1580	Revāyat of Ferīdūn Marzbān
10	?	Letter to the Dastūrs of Broach
11	1597	Letter to the Dastūr Kāmdīn Padam of Broach
12	circa 1600	Revāyat of Kā'ūs Māhyār
13	1626-27	Revāyat of Bahman Esfandiyār
14	1635	Revāyat
15	1645-49	Revāyat of Dastūr Barzo
16	circa 1668	Letter to Dastūr Rostam Peshotān and letter to the priests of Sūrat

17	1681	Letter to the Dastūrs of Broach, Navsari and Cambay
18	1721	Revāyat of Jāmāsp Āsā
19	1743	Revāyat to Mobed Kā'ūs and Dastūr Dārāb Sohrāb of Sūrat
20	circa 1747-48	Revāyat to Mānekjī Rostamjī Sett
21	1768	Revāyat to Dastūr Dārāb Sohrāb and others of Sūrat
22	1773	Revāyat of Kā'ūs Rostam Jalāl

この 22 点の中で，1635 年に写本を書写した Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsp を探るに当たって精査すべきは，1600 年から 1668 年をカバーする Nr 12 ～ 16 である。ゾロアスター教徒の個人名はパトロニミックを用いるので，仮に本人の名を見出せないにしても，Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsp に該当する父称の連続があれば，それは本人の直系親族である可能性が高いと判断できるからである。この趣旨に沿って今回精査したのが，以下の 5 点の往復書簡である。

図 11：1600-68 年の往復書簡のコロフォンに見られるゾロアスター教神官名

Nr	Date	署名	出典
12	circa 1600	インド側の差出人としては，ナヴサーリー 5 名，スーラト 2 名，バローチ 4 名，アンクレーシュワル 2 名，カンバーヤト 5 名。イラン側の回答者の記載はなし。	Unvâlâ 1922, vol. 2, p. 455；Dhabhar 1932, pp. 614-615
13	1626-27	インド側の差出人の記載は無し。イラン側の回答者としては，7 名。	Unvâlâ 1922, vol. 2, p. 163；Dhabhar 1932, p. 595
14	1635	インド側の差出人としては，2 名。イラン側の回答者としては，2 名。	Vitalone 1987, p. 16
15	1645-49	インド側の差出人としては，ナヴサーリー 9 名，スーラト 2 名，バローチ 9 名，その他 3 名。イラン側の回答者としては，40 名。	Unvâlâ 1922, vol. 2, pp. 161-162；Dhabhar 1932, pp. 592-594
16	circa 1668	インド側の差出人の記載は無し。イラン側の回答者としては，7 名。	Unvâlâ 1922, vol. 2, p. 474；Dhabhar 1932, pp. 622-624

この中では，Nr 12 には該当者なし。Nr 13 にも該当者なし。Nr 14 にはインド側の差出人として Dastūr Bahrām の名がある。但し，父称に関する言及は無し。Nr 16 には，該当者なしである。

だが，Nr 15 には，3 ヶ所に該当する名前が見いだせる。第 1 に，1645 年にインドからイランへ書簡を運んだ人物として，Bahrām Mehrabān Yazdī の名がある（Unvâlâ 1922, vol. 2, pp. 430-455；Dhabhar 1932, p. lxii）。第 2 に，1649 年に作成された回答書の回答者の第 2 位に，Dastūr Bahrām Dastūr Mehrabān の名がある。そして，第 3 に，その際に回答書を筆記した書記の名前として，Mehrabān Dastūr Bahrām Dastūr Mehrabān Sūrakī の名がある（Unvâlâ 1922, vol. 2, pp. 430-455；Dhabhar 1932, p. lxii）。因みに，ニスバ（地名姓）に表れている Sūrak とは，イランのヤズド近郊のゾロアスター教徒村タフトに隣接する地域の名称である。

第 2 の Dastūr Bahrām Dastūr Mehrabān と第 3 の Mehrabān Dastūr Bahrām Dastūr Mehrabān Sūrakī は，ほぼ間違いなく親子であろう。つまり，父親である大神官 Dastūr Bahrām Dastūr Mehrabān が口述した内容を，息子だが神官としての称号を得ていない Mehrabān Dastūr Bahrām Dastūr Mehrabān Sūrakī が筆記したと考えるのが妥当である。また，パトロニミックに Dastūr（大神官）との称号が付与されているので，彼らが歴代神官だった家系に属することが判明する。更に，息子の方のニスバから，彼らがヤズド近郊の村に居住していたことも確実である。父子が別居していた可能性もなくはないが，神官職は先祖伝来の拝火神殿に付属した父子相承の家職なので，同居していたと考える方が自然である。

ただ，第 1 の Bahrām Mehrabān Yazdī と 第 2 の Dastūr Bahrām Dastūr Mehrabān の関係が分からない。一応，本人名と父称は一致している。また，スーラクはヤズド近郊なので，スーラキーがヤズディーと名乗っても間違いではない。また，何らかの事情でイラン出身の神官がインドに滞在していてもおかしくはない。ただ，自分の権威を以って宗教上の問題に回答する資格を持つなら，書簡を持ち帰ったりせずに現地で解決した方が早いと思われるし，神官の称号も欠けているので，両者の本名と父称がたまたま一致しただけとも考えられる。

即ち，1645 年にインドからイランへ質問書を運んだ Bahrām Mehrabān Yazdī と，1649 年に回答した Dastūr Bahrām Dastūr Mehrabān は，別人である可能性の方が高いだろう。

ここまでの情報を総合すると，Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsp は，第 2 の Dastūr Bahrām Dastūr Mehrabān に該当すると結論しても良いと思われる。即ち，1635 年に Majles 13522/4（Tehran）を書写した Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsp は，ヤズド近郊のスーラク村に在住するゾロアスター教神官で，1649 年までには大神官に就任し，インドからの質問書に対して序列 2 位で回答するなど，相当の宗教的権威を獲得した人物だった。1649 年段階で神官に叙任されていない若年の息子がいるので，仮に彼の年齢を 40 ～ 50 歳とすれば，1600 ～ 10 年の出生となり，ほぼアーザル・カイヴァーン学派の第 2 世代と同時代を生きたことになる。想像を逞しくすれば，20 代～ 30 代の比較的若い時期に，当時イラン国内に出回り始めたアーザル・カイヴァーン学派文献に触れる機会を得て，それを書写したのだと考えられる。

2-5. Majles 13522/4（Tehran）写本における『ウラマー・イェ・イスラーム』（UI-2）の引用

Majles 13522/4（Tehran）写本に関してもう一つ興味深い点は，Nr. 2-Nr. 6 写本には収録されていない『ウラマー・イェ・イスラーム』（UI-2）の引用も含めて筆写されている点である。その異動を，Asha and Mīrshāhī 2004 の章分けとの対照コンコーダンスで示せば，図 10 のようになる。

図 12：Majles 13522/4（Tehran）写本と刊本のコンコーダンス

Tehran Majles 13522/4	Asha and Mīrshāhī 2004
§ 1-7	§ 1-7
§（8）	§ 8
§（9）	§ 9
§ 10	§ 10

§ 11	–
§ 12	–
§ 13-34	§ 11-32
§ 35	–
§ UI-2 の § 1-44（§ 45-52 は欠落）	–

Majles 13522/4（Tehran）写本の後半部分に接続されているゾロアスター教ペルシア語文献『ウラマー・イェ・イスラーム』（UI-2 版）とは，サーサーン王朝時代にはゾロアスター教の主流だったが，サーサーン王朝滅亡後に二元論に取って代わられたズルヴァーン主義思想を表明した文献である。既に滅亡した思想を説く文献なので，その写本の書写伝統は非常に限られており，ゾロアスター教神官の中でもこれを入手できた書写生はかなり絞られる。2012 年段階までに判明した 3 種類のヴァージョンの全校訂と写本書写経路については，Aoki 2014；2015a；2015b を参照。

即ち，Majles 13522/4（Tehran）は，正規のゾロアスター教神官が書写した点に加えて，『ウラマー・イェ・イスラーム』（UI-2 版）をほぼ全文引用している点でも，ゾロアスター教ペルシア語写本中で独自の重要性を持つ。そして，仮に本写本の前半部分 *Dāstān-e Mōbedān Mōbed* がアーザル・カイヴァーン学派文献だとすれば，Majles 13522/4（Tehran）は，ヤズド出身のゾロアスター教神官 Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsp が，如何なる経路によってかズルヴァーン主義文献『ウラマー・イェ・イスラーム』（UI-2）を入手し，更にそれを書写しようと思い立ち，その上如何なる経路によってかアーザル・カイヴァーン学派文献まで入手して，それらをセット化して書写した写本として，ゾロアスター教研究上極めて特異な位置を占める。

3．Majles 13522/4（Tehran）写本研究

3-1. 正統的ゾロアスター教神官＝ズルヴァーン主義＝アーザル・カイヴァー

ン学派：以上の情報と考察から，以下の内容が明らかになった。Majles 13522/4（Tehran）は，イランにおけるゾロアスター教の中心地であるヤズド在住の正統的ゾロアスター教神官によって筆写された写本であり，ズルヴァーン主義を説く稀覯文献『ウラマー・イェ・イスラーム』（UI-2 版）を引用する点で貴重である。そしてまた，前半部分の *Dāstān-e Mōbedān Mōbed* が上記の「指標」に合致するとすれば，失われたアーザル・カイヴァーン学派文献 36 点の何れかに該当すると判断される点でも重要である。

即ち，本写本は，ヤズドという地に於いて，正統的ゾロアスター教神官＝ズルヴァーン主義＝アーザル・カイヴァーン学派を結ぶ可能性がある文献と位置付けられる。従って，本写本の研究は，アーザル・カイヴァーン学派の新出文献を提示すると同時に，1635 年前後のヤズドのゾロアスター教徒社会の中での，「正統的ゾロアスター教神官＝ズルヴァーン主義＝アーザル・カイヴァーン学派」の 3 者の思想的な関連性を解明すると期待される。

3-2. 今後の課題と展望：このように多様な側面を持つ Majles 13522/4（Tehran）を研究するに当たり，文献上確実に問いうる設問①～②と，思想研究上の課題③～④に分けて，今後の課題と展望を列挙したい。

① ゾロアスター教ズルヴァーン主義研究上の課題・その 1：現在入手している文献史料に即して最も具体的に立て得る設問は，Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsb が引用している『ウラマー・イェ・イスラーム』UI-2 の写本系統である。この稀覯文献の残存写本は多くはなく，既に詳細な写本系統図が作成されている。従って，Majles 13522/4（Tehran）の引用と既存の校訂版を対照すれば，かなりの確度で Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsb が用いた写本の系統を明らかに出来るだろう。これは，ゾロアスター教ズルヴァーン主義がゾロアスター教コミュニティー内部で伝承された写本経路を確定する点で重要である。

② ゾロアスター教ズルヴァーン主義上の課題・その2：逆に，ズルヴァーン主義研究上，『ウラマー・イェ・イスラーム』（UI-2）写本の系統図を組み立てることはできたが，それらが書写された地域までは特定できていなかった。今回，Bahrām Mehrabān Bahrām Goshtāsb が引用している『ウラマー・イェ・イスラーム』（UI-2）の写本系統が判明すれば，その写本群が1635年段階までは，インドではなくイランで書写されていたことを実証するだろう。これも，ゾロアスター教ズルヴァーン主義が伝承された写本経路を確定する点で重要である。

①～②の文献上問い得る着実な設問がクリアされた段階で，正統的なゾロアスター教神官が1635年というかなり早い時期に，どのようにしてこの文献を入手したのかが解明される。また，彼は何故それをゾロアスター教の中で異端的なズルヴァーン主義文献と接続させて書写したかの動機も併せて解明されるだろう。そして，その後には，思想研究上の2つの設問を設定し得ると期待される。

③ アーザル・カイヴァーン学派研究上の課題・その1：*Dāstān-e Mōbedān Mōbed* の新しい校訂版は，上記の「指標」に照らして，本書がアーザル・カイヴァーン学派文献であると証明できるだろうか？　この設問に答える為には，本書の新しい校訂版が要請される。因みに，本書は Nr. 2-Nr. 6 に関しては一度校訂されているので，コピーであると証明された余分な写本まで用いる必要はない。即ち，底本は1635年書写の Tehran Majles 13522/4 で，これを1809年書写の München M7/13 と1877年書写の Navsari F52/2 で補うだけで充分である。また，章分けは，全32章までは Asha and Mīrshāhī 2004 に倣い，その後の UI-2 の付加部分に関しては Aoki 2014 に倣う。なお，München M7/13 の fol. 190 以後の 2

フォリオは同じコーデックス中の錯簡なので，注意が必要である。

④　アーザル・カイヴァーン学派研究上の課題・その 2：最後に問いうる設問は，*Dāstān-e Mōbedān Mōbed* がアーザル・カイヴァーン学派文献だとして，それが図 7 ～ 8 中で挙げた 36 点の未発見文献の中のどれにあたるかの確定，及び著者は誰であるかの確定である。これは，校訂版の成立によって判明する可能性がある課題である。

③～④の思想研究上の設問がクリアされた先には，アーザル・カイヴァーン学派と正統的ゾロアスター教との関係，アーザル・カイヴァーン学派とヌクタヴィー教との関係，更には照明学派，ディーネ・イラーヒー，イスファハーン学派など 16 ～ 17 世紀のイスラーム諸思想との関係といった思想史的な課題も存在している。また，仮にアーザル・カイヴァーン学派がヌクタヴィー教の影響下に成立したとしたら，神智学協会やエルメ・フシュヌーム，サーヘブ・デラーンに対する再評価も必要になるだろう。即ち，本人たちの主張に反して，彼らは「古代から連綿と続いてきたゾロアスター教神秘主義」を継承した思想集団などではなく，それとは知らずにホルーフィー教・ヌクタヴィー教を継承した思想集団だったことになる。

最後に，本研究が，「1-5. アーザル・カイヴァーン学派に関する現在の研究状況」で述べた現状に資することを期待しつつ，出来るだけ早く *Dāstān-e Mōbedān Mōbed* の校訂版を公表したい。

1　アーザル・カイヴァーンの没年は，資料によって異なる。即ち，*Shārestān-e Chahār Chaman* では西暦 1619 年，*Dabestān-e Mazāheb* では西暦 1618 年と記されている。資料の成立年代を考慮すると，前者が 1610-24 年成立，後者が 1652-58 年成立なので，単純に言えば，前者の方に信憑性がある，即ち，アーザル・カイヴァーンの没年は 1619 年である可能性が高い。

2　Modi 1930, p. 32 によると，*Shārestān-e Chahār Chaman* と *Dabestān-e Mazāheb* の中では，アーザル・カイヴァーンはゾロアスター教神官としての称号を冠して呼ば

れてはいない。彼をゾロアスター教大神官 Dastūr と呼んだのは，Mobed Fardunji Marzban による *Dabestān-e Mazāheb* 翻訳が最初である。以後，弟子たちがゾロアスター教神官 Mōbed なら，アーザル・カイヴァーンは大神官 Dastūr であろうとの先入観から，この称号が定着して現代に至っている。即ち，文献上で確認される称号の上では，彼がゾロアスター教神官であったとの確証は存在しない。

3　移住時期の問題は，アーザル・カイヴァーン学派の思想形成の場をイランと捉えるか，インドと捉えるかに関わってくる。早く見積もれば，インド的要素を強調する結果になり，遅く見積もれば，イラン的要素を重視する結果になる。因みに，後述のディーネ・イラーヒーの開教は 1582 年，シャー・アッバースによるヌクタヴィー教の大弾圧は 1593 年である。Mojtabāī 1989, p. 251 は，西暦 1592 年移住説を採っており，現在のところ，各研究者の間ではこの見積もりが定説化しているものの，確証がある訳ではない。

4　本書の題名については，3 種類の読み方が提案されている。時代順に，

① Shea, David and Anthony Troyer 1843：*Zardosht Afshār*（『ゾロアスターの教友』）

② Modi 1930, p. 24：*Zar-e Dasht Afshār*（『ホスロー・パルヴェーズ所蔵の黄金』）

③ Corbin 1989, p. 186：*Zar-e Dastafshār*（『手で加工できるほど打ち延ばされた黄金』）

である。内容的には不可解な面もあるが，Mīrzā Bahrām Rostam Nasrābādī 1878, p. 33 の石版刷りの綴りを参照する限りでは，③説が支持される。なお，Corbin が Corbin 1989 で「Modi は様々な理由から *Dashtafshār* と解読した」と事実を充分反映しない解説を行って，自説の先取権を主張しているように見えるのは問題である。

5　*Dabestān-e Mazāheb* によると，ヘラート出身で，Farzāne Khūshī の紹介でイスタフル（またはシーラーズ）時代のアーザル・カイヴァーンに弟子入りした。師のインド移住にも同行し，西暦 1630 年にカシミールで死去。

6　*Dabestān-e Mazāheb* によると，アーザル・カイヴァーンのイスタフル時代（またはシーラーズ）からの古参弟子で，インド移住に同行した。パトナーで禁欲修行に励んだ後，西暦 1624 年にラーホールで死去。

7　これらの文献のうち，特に *Dasātīr-e Āsmānī* は，のちに神智学協会とエルメ・フシュヌームに活用されてオカルト科学推進に資しているので，そのような疑念を持たれる余地は充分にあった。

8　公刊前の原稿を拝読させて頂いた Sheffield 博士のご厚意には，記して感謝したい。

9　Mōbed Hūsh が KayKhosrow Isfandiyār を胸に抱きかかえてインドへ連れて行ったとされるので，彼の出生地はイランと推定される。Reżāzāde Malek 1983 は，

Dabestān-e Mazāheb の著者を KayKhosrow Isfandiyār と推測するものの，*Dabestān-e Mazāheb* の著者は西暦 1616 年に生まれたことが確定しているので，この推測が成り立つ為には，アーザル・カイヴァーンのインド移住を西暦 1616 年以降まで引き下げなくてはならない。だが，当時アーザル・カイヴァーンは 83 歳だから，これはほぼ不可能である。因みに，インド移住後の KayKhosrow Isfandiyār は，ラーホールに在住していたらしく，Farzāne Bahrām が彼に近侍していたとされる。*Shārestān-e Chahār Chaman* も，KayKhosrow Isfandiyār の為に執筆された可能性がある。

10　Dādpūye ibn Hūsh Ā'īn との読みも可能。「ダードパワイヒ」と発音するとパフラヴィー語らしく聞こえるが，意味は不明。なお，Modi 1930 と Corbin 1989 の概説の中では，この名前には触れられていない。16-17 世紀に活動したアーザル・カイヴァーン学派の一員と考えられるものの，同時代資料である *Shārestān-e Chahār Chaman* と *Dabestān-e Mazāheb* の中には，この名は見出せない。

11　Corbin 1989, p. 186 では，この名を Ḥakīm Khvēshtāb と紹介しているが，Mīrzā Bahrām Rostam Nasrābādī 1878, p. 2 には Ḥakīm Pīshtāb とある。ここを Ḥakīm Pīshtāb と正しく理解しないと，この賢者が *Zāyande Rūd* にも登場する事実を把握できない。

12　1930 年以前のイラン学の黎明期の論争については，現在では骨董的な価値しかない。詳しくは，青木　2007 年，pp. 293-314 参照。

13　公刊前の原稿を拝読させて頂いた Rezania 博士のご厚意には，記して感謝したい。

14　口頭発表の内容を先に論文で言及することを許可して下さった Sheffield 博士には，記して感謝したい。

15　Mollā Kā'ūs は，1780 年にイランからかなりの分量のゾロアスター教ペルシア語写本をインドに将来したゾロアスター教カディーミー派の神官である。なお，青木　2012 年，p. 135 で，筆者は Mollā Kā'ūs のハイデラバード・デカン移住の理由を「シャーハンシャーヒー派との軋轢の為」と推測していたが，Sheffield 博士の最新の研究によると，ハイデラバード藩王国に占星術師として招聘されていたことが判明した。ここに情報を訂正したい。Sheffield 2014c 参照。本稿に関しても，公刊前の原稿を拝読させて頂いた Sheffield 博士のご厚意に，記して感謝したい。

16　古代ギリシア哲学及びそれを継承したイスラーム哲学では，天圏のナンバリングは昇冪順で並べるが，アーザル・カイヴァーン学派文献では全て降冪順で並べている。理由は不明である。

17　ヌクタヴィー教とは，イスマーイール派ニザーリー派や文字神秘主義のホルー

フィー教団の思想的要素を取り込みつつ，ギーラーン出身の Maḥmūd Pasīkhvānī が 1397 年に自らをマフディーだと宣言して開教した新宗教である。教祖 Maḥmūd Pasīkhvānī は 16 冊の著書を執筆し（因みに 1 冊も校訂されていない），輪廻転生・禁欲主義・循環時間論などを主張した。1427 年に彼が没した後，教団組織はサファヴィー王朝と良好な関係を保ち，歴代シャーをマフディーだと宣言するなど王朝イデオロギーを支持していたが，1590 年代にシャー・アッバース王との関係が急速に悪化し，1593 年に大弾圧を蒙った。その結果，多くの教団員はインドへと亡命し，ムガル帝国のアクバル皇帝をマフディーと仰ぎ，ディーネ・イラーヒーの開教に貢献したとされる。しかし，インドでも長続きせず，17 世紀中には消滅した。Dachraoui 1995 参照。

18　本稿に関しても，公刊前の原稿を拝読させて頂いた Sheffield 博士のご厚意には，記して感謝したい。

19　*Shārestān-e Chahār Chaman* に quotation あり。

20　*Shārestān-e Chahār Chaman* に quotation あり。

21　*Shārestān-e Chahār Chaman* に quotation あり。

22　著者名から類推すると，*Zūre-ye Bāstānī* に当たるか？

23　著者名から類推すると，こちらが *Zūre-ye Bāstānī* に当たるか？

24　Mōbed Khūshī と同一人物か？

25　ドイツの学会で Nationalismus という単語を使用した際，かなりの批判を浴びたので，この語の英訳・ドイツ語訳には慎重になる必要がある。しかし，筆者は適訳を思いあぐねている。

26　Malihe Karbassiān は，16-17 世紀のアーザル・カイヴァーン学派から逆算して，3-10 世紀のゾロアスター教にも惑星崇拝的異端宗派が存在していた筈であると主張し，これを博論の主要テーマの 1 つにしていると聞いた。しかし，サーサーン朝期の文献に証拠を見出せない以上，筆者は如何にしても納得できなかった。

27　この校訂版の存在に関しては，Sheffield 博士から 2014 年 6 月 9 日付けでご教示頂き，同時に現物 PDF をご送付頂いた。記して感謝したい。

28　バガリアー系神官団内部閲覧専用に作成された本書は，宮崎公立大学の中別府温和教授のご厚意によって貸与頂いた。記して感謝したい。

29　このリストは，Salamanca 大学（スペイン）の Albert Cantera 教授が蒐集した新出『アヴェスター』写本のコロフォンから作成された未公開の研究資料である。教授からは，2013 年 2 月 5 日付けでご送付頂いた。記して感謝したい。

30　リスト作成に当たっては，Vitalone 1987 を参照した。

参考文献表

写本

K. R. Cama Oriental Institute R- Ⅷ -36 *Dasātīr-e Āsmānī*

K. R. Cama Oriental Institute H.P.131 *Dasātīr-e Āsmānī*

London Or. 8894 “Ketāb-e Dādār ebn-e Dāddukht”

Mashhad Āstān-e Quds-e Razavī Persian 144/13 “Ketāb Zarātusht”

München M7/13 “Ketāb-e Dādār ebn-e Dāddukht”

Navsari F52/2 “Ārāste”

St. Petersburg PNS 11 “Zarātusht Nāme,” “Changragāche Nāme,” “Ardā Vīrāf Nāme,” “Sad Dar-e Nazm”

Tehran Majles 13522/4 “Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht va Keyfīyat-e ū”

Tehran Sepahsālār Persian 2864/12 “Zarātusht Nāme”

石版刷り

Bahrām Bīzhan et al.（ed.）1862：*Shārestān-e Chahār Chaman*, Bombay：Matba‘-e Mozaffarī.（reprint 1919）

Dabestān-e mazāheb 1850-51, Bombay

Mollā Fīrūz ebn-e Kā’ūs（ed.）1818：*Dasātīr-Nāme*, Bombay

Hātariyā, Mānekji Limji（ed.）1846：*Ketāb-e Khīshtāb va Zar-e Dast Afshār va Zende Rūd*, Bombay：Nushīrvānjī Taymūrjī.

Mīr Ashraf ‘Alī（ed.）1848：*Jām-e Kaykhusraw*, Bombay：Fazl al-Dīn Khamkar.

Mīrzā Bahrām Rostam Nasrābādī（ed.）1878：*Ā’īn-e Hūshang*, Bombay.

刊本

Asha, Rahām and Mas‘ūd Mīrshāhī（eds.）2004：*Rāste*：*Āmūze-ye Bezeshkī-ye Moghān*, Tehrān：Enteshārāt-e Asāṭīr.

Reżāzāde Malek, Raḥīm（ed.）1983：*Dabestān-e Mazāheb*, Tehrān：Tahūrī.

翻訳

Mollā Fīrūz ebn-e Kā’ūs（tr.）1888：*The Desātīr, or the Sacred Writings of the Ancient Persian Prophets, together with the Commentary of the Fifth Sāsān,* Bombay

Shea, David and Anthony Troyer（tr.）1843：*The Dabistan, or School of Manners*. London：Oriental Translation Fund.

研究

Aoki, Takeshi 2001a："The Role of Āzar Kayvān in Zoroastrian and Islamic Mysticism.", *K. R. Cama Oriental Institute Third International Congress Proceedings*, Bombay：K. R. Cama Oriental Institute, pp. 259-277.

－ 2001b："The Genealogy of Philosophical Zoroastrianism," *Journal of the K. R. Cama Oriental Institute,* No. 64, Mumbai, pp. 59-78.

－ 2002："The Transformation of Zoroastrian Messianism in Mughal India － from the Advent of Zoroastrian Holy Emperor to the Change of Zoroastrianism －," *Orient,* Vol. 37, pp. 136-166.

－ 2014："A Study of Zurvanite Zoroastrianism：an Edition of *'Ulamā-ye Islām of Another Version*（UI-2）and its Long Quotation of a Book of Āzar Kayvān School,"『林悟殊教授古稀纪念文集』［original title in Chinese, its English title is *Researches on the Three Foreign Religions —Papers in Honour for Prof. Lin Wushu on His 70th Birthday*］, eds by Zhang Xiaogui et al., Lanzhou：Lanzhou Daxue Chubanshe, pp. 390-410（forthcoming）.

－ 2015a："Zoroastrian Persian Manuscripts on Zurvanism in Iran and India with an edition of *'Ulamā-ye Islām from the Rivāyat of Kāma Bohra*（UI-KB）," *Navsari Zoroastrian Studies Conference*（*12-15 / January / 2013*）*Proceedings*, Mumbai（forthcoming）

－ 2015b："A Zoroastrian Refutation to the Mu'tazilite Theology with an Edition of *'Ulamā-ye Islām*（UI-1）," *Journal of Central Eurasian Studies*, vol. 4, Seoul National University（forthcoming）

Babayan, Kathryn 2002. *Mystics, Monarchs, and Messiahs*：*Cultural Landscapes of Early Modern Iran.* Cambridge：Harvard University Press.

Bartholomae, Ch. 1915：*Die Zendhandschriften der K. Hof- und Staatsbibliothek in München*, München.

Barzegar, Karim Najafi 2013："The Nuqtavī Movement and the Question of Its Exodus during the Safavid Period（Sixteenth Century AD）：A Historical Survey," *Indian Historical Review*, 40-1, pp. 41-66.

Bharucha, Sheriarji Dadabhai 1907： *The Dasâtîr being a Paper prepared*

for the Tenth International Congress of Orientalists held at Geneva in 1894 AC with Appendix containing a Brief Summary of its Contents, Bombay（Reprint 2006 Mumbai：the K. R. Cama Oriental Institute）

Cantera, Albert 2012：“List of Zoroastrian MSS Copyists,” Private List.

Cereti, Carlo 1996：“Zoroastrian Manuscripts Belonging to the Bhandarkar Institute Collection, Pune,” *East and West*, 46, pp. 441-51.

Corbin, Henry 1989：“Āzar Kayvān,” *Encyclopaedia Iranica*, vol. 3, pp. 183-87.

Dachraoui, F. 1995：“Nuk̲tawiyya,” *Encyclopaedia of Islam*, New Edition, vol. 8, pp. 114-117.

Dhabhar, E. B. N. 1923：*Descriptive Catalogue of all Manuscripts in the First Dastur Meherji Rana Library, Navsari*, Bombay.

Haug, Martin 1884：*Essays on the Sacred Language, Writings, and Religion of the Parsis*, Bombay.

Meherjirana, Ervad Rustomji Jamaspji Dustoor 1899：*The Geneology of the Naosari Parsi Priests*, issued for private circulation only by the library of Austa Naoroz Ervad M. Parveez.

Modi, Jivanji Jamshedji 1930 “A Parsee High Priest（Dastur Azar Kaiwan, 1529-1614 AD）with his Zoroastrian Disciples in Patna, in the 16th and 17th Century A.C.” *Journal of the K. R. Cama Oriental Institute* 20, pp. 1-85.

Mojtabā'ī, Fath Allāh 1989：“Āzar Kayvān,” *Dā'erat al-Ma'āref-e Bozorg-e Eslāmī*, vol. 1, Tehran, pp. 247-259.

Pūr-e Dā'ūd, Ebrāhīm 1947：“Dasātīr,” *Farhang-e Īrān Bāstān*, Tehran, pp. 17-51.

Rezania, Kianoosh 2014：“Āzar Keyvān,” *Dānešnāme-ye Ǧahān-e Eslām*［*Encyclopedia Islamica*］, Tehran：Bonyād-e Dā'erat ol-ma'āref-e Eslāmī.（forthcoming）

Sheffield, Daniel J. 2014a：“The Language of Heaven in Safavid Iran：Speech and Cosmology in the Thought of Āzar Kayvān and His Followers,” *No Tapping around Philology：A Festschrift in Honor of Wheeler McIntosh Thackston Jr.'s 70th Birthday*, edited by Alireza Korangy and Daniel J. Sheffield, Wiesbaden：Harrassowitz Verlag pp. 161-183

－ 2014b：“Primary Sources：New Persian,” *The Wiley-Blackwell Companion to Zoroastrianism*, edited by Michael Stausberg and Yuhan Vevaina, Oxford：Wiley-Blackwell,（forthcoming）

－ 2014c：“Iran, the Mark of Paradise or the Land of Ruin ？ Historical Approaches to

Reading Two Parsi Zoroastrian Travelogues," *On the Wonders of Land and Sea*：*Persianate Travel Writing*, edited by Roberta Micallef and Sunil Sharma, Cambridge：Harvard University Press, pp. 14-42（forthcoming）

Spies, Otto 1935：Three Treatises on Mysticism by Shihābuddīn Suhrawardī Maqtūl with on account of his Life and Poetry, Stuttgart：Kohlhammer.

Unvala, Jamshedji Maneckji 1940：*Collection of Colophons of Manuscripts bearing on Zoroastrianism in Some Libraries of Europe*, Bombay.

Vitalone, Mario 1987：*The Persian Revāyats*：*A Bibliographic Reconnaissance*, Naples：Istituto Universitario Orientale.

West, E. W. 1896-1904："Pahlavi Literature," *Grundriss der iranischen Philologie*, zweiter Band, pp. 75-129.

青木健　2001 年：「中世ゾロアスター教の後継者－『シーラーズ系ゾロアスター教徒』の興亡－」，『オリエント』，44-1，pp. 42-57。

－ 2002 年 a：「近世ゾロアスター教の救世主思想－ゾロアスター教神聖皇帝の到来から宗教思想の変容へ－」，『オリエント』，45-1，pp. 75-95。

－ 2002 年 b：「ゾロアスター教神秘主義思想の形成－イスラーム神秘主義の影響とゾロアスター教の伝統－」，『東洋学報』，84-2，pp. 023-051。

－ 2003 年：「インド・ゾロアスター教徒の思想形成」，小林フェローシップ 2002 年度研究助成論文，富士ゼロックス小林節太郎記念基金。

－ 2007 年：『ゾロアスター教の興亡－サーサーン朝ペルシアからムガル帝国へ－』，刀水書房。

－ 2012年：「ゾロアスター教ズルヴァーン主義研究4－『ウラマー・イェ・イスラーム』の写本蒐集と校訂翻訳－」，『東洋文化研究所紀要』，第 161 冊，pp. 144（137）-118（163）。

謝辞

本稿執筆に当たっては下記の研究予算からご高配を頂いた。ここに明記して感謝の意を表したい。

ドイツ研究振興協会（Deutsche Forschungsgemeinschaft）・ボン大学イスラーム学研究所獲得予算（2014 年度分）

慶應義塾大学言語文化研究所・共同研究 B 方式「中東の一神教的思想風土における哲学的伝統の受容と変容」（平成 26 年度分）

A Study on Āzar Kayvān School
——Collecting and Editing MSS of the *Dāstān-e Mōbedān Mōbed*——

by Takeshi Aoki

As a beginning of this small paper on the Āzar Kayvān School, a good starting point is the outline of Āzar Kayvān School Studies until 2014, especially the publication data of Āzar Kayvān School's eight Persian treatises and their translations.

Prior interpretations of Āzar Kayvān school's religious thought can be best summarized in Rezania 2014 and Sheffield 2014a. In the latter half of the 20th Century, Āzar Kayvānian religious thought is always explained as a Zoroastrian branch of Suhrawardī Maqtūl's Illiminationism. Representative scholars of this interpretation are Henry Corbin (especially Corbin 1989), Fath Allāh Mojtabā'ī (Mojtabā'ī 1989), Seyyed Hossein Nasr (several surveys of Islamic mysticism), Kevin R. D. Shepherd (Shepherd 1988) and Takeshi Aoki (Aoki 2001a and 2001b).

At the turn of the century, however, the trend changed drastically. Some scholars began to connect Āzar Kayvān School with other religious thoughts in Safavid Iran and Mughal India. Takeshi Aoki tried to connect Āzar Kayvān School's Eschatology with Dīn-e Ilāhī (Aoki 2002a), and connect the contents of the *Jām-e Kay Khosrow* with the soteriology of the Nūrbakhsh order (2002b). Kathryn Babayan supposed close connection between Āzar Kayvān School and the Nuqtavī order (Babayan 2002).

Since 2009, however, I continue to search for the Zoroastrian Persian MSS possessed at Islamic MSS libraries both in Iran and India and, in the course of those researches, I discovered some new MSS of already-known Āzar Kayvānian treastises (not in Yazd or Kermān, but mainly in the western part of Iran).

According to their colophons, a part of them were written before the publication of lithographies in the 19th century and there are some differences between the lithographies and those MSS. So we must look more carefully into the MSS data to prepare new editions of Āzar Kayvānian literature. In this paper, I would like to take up a Persian treatise as a possible Āzar Kayvānian lost treatise, *Dāstān-e Mōbedān Mōbed Dādār Dāddukht va Keyfīyat-e ān* in the Majles 13522 Codex possessed at the National Congress Library of Iran (Tehrān).